

校定

平家物語百二十句本

高橋貞一識

平家卷第四

二九四

のぶつらかまくらどのよりめしいたさるゝ事

第三十一句 いくしま御かう……………二九六

あんとか天わう御せんそ

しんゐんとぼどのへじゆぎよの事

おなじくふくはらべつきうじゆぎよの事

あんとか天わう御そくゐ

第三十四句 ぎおう……………三一四

木のしたかけかなやきの事

げんじやうらくの物がたりの事

よりまさのみやこいで

なんりやうかなやきの事

第三十二句 たかくらのみやむほん……………三〇四

げんじぞろひ

さうせうなごんうらかた

きそ十郎くらんどかいみやうれいし

とぼどのいたちけしの事

第三十五句 てうじやう……………三二〇

みゐでら大しゆ宮どうしんの事

さんもんにたいするのじやう

なんとにたいするのじやう

こうぶくじのへんてう

第三十三句 のぶつらかつせん……………三二〇

みやのみやこおち

のぶつらこえだちさん

のぶつらゆるさるゝ事

第三十六句 三井でら大しゆそろひ……………三二五

よりまさ夜うちの下ち

一によぼうがながせんぎの事

きよみばらの天わうの物がたり

かんこくくはんのさた

第三十七句 はしがつせん……………三二九

こえだせみおれのさた

やぎりのたちまのふるまひ

つゝぬじやうめうのふるまひ

一らいほうしうちじに

第四十句

ぬえ……………三四三

なんどの大しゆ七十よき御むかひに

まいる事

くびじつけん

わかみやしゆつけ

第三十八句 よりまささいご……………三三三

あしかが又太郎うちがは下ち

よりまさじせい

ちやう七となふりまさのくびかくす事

ちやくしなかつな二なんかねつな三なんなか

いゑ

そのこなかみつうちじにの事

第三十九句 たかくらの宮さいご……………三三八

六でうの大夫むねのぶみれん

## 平家卷第四

いつくしま御かう

なりのりー  
成範(寛一本)。

ふることゝふる  
き事(寛一本)。

おしう四年正月一日、とぼどのには、にう道しやうこくもゆるされず、ほうわうもをそれさせまし／＼ければ、ぐはん日ぐはん三のあひだ、さんにうする人もなし。こせうなごんにうだうのしそく、ふちはらの中なごんりのり、そのおとゝ、さきやうの太夫ながのり、これ二人ばかりぞゆるされてまいられける。同廿日、とうぐう御はかまぎならびに御まなはじめきこしめすとして、めでたき事どもありしかども、ほうわうは御みゝのよそにぞきこしめす。二月廿一日、しゆじやうことなる御つゝがもわたらせ給はぬを、をしおろしたてまつる。とうぐうせんそあり。これはにう道しやうこく、よろづおもふまゝなるがいたすところなり。時よくなりぬとてひしめきあへり。ないしどころ、しんじ、ほうけん、わたしたてまつる。かんだちべちんにあつまりて、ふること共せんれいにまかせておこなひしに、べんのないし御けんとてあゆみいづ。せいりやうでんのにしおもてにて、やすみちの中將うけとる。びつ中のないし、しるしのみはことりいだす。たかふさのせうしやううけとる。ないしどころしるしのみはこ、こよひばかりやてをもかけけんとおもひあへり。ないしのこゝろのうちども、さこそとおぼえてあはれぞおほかりける。中にもしるしのみはこをば、せうなごんのないしとりいづべかりしを、こよひこれにてをもかけては、ながくあたらしきないしにはなるまじきよし、人の申けるをきぬ

もとく——さき  
く(寛一本)。

て、そのごにじしてとりいださざりけり。としすでにたけたり。二たびさかりをぐすべきにもあらずとて、人々にくみあへりしに、びつ中のないしは、しやうねん十六さい、いまだいとけなき身ながら、そのごにわざとのぞみてとりいだしける。ゆうなりけるありさまなり。つたはれる御物ども、しなくつかさくうけとりてける。しんていのくはうきよ、五でうのだいいへわたしたてまつる。かんあんでんには、ひのかげもかすかに、けい人のこゑもとゞまり、たき口のもんぜきもたえにければ、ふるき人々、めでたきいはひの中にも、み(な)なみだをながし、心をいたましむ。さ大じんちんにいで御くらみゆづりの事共おほせしをきゐて、心ある人々は、なみだをながしそでをうるほす。われと御くらみをまふけのきみにゆづりたてまつれば、まこやの山の中にも、しづかになど、おぼしめすもとくだにも、あはれはおほきならひぞかし。いはんやこれは心ならずをしおろされさせ給ひけんあはれさ、申もなかくおろかなり。しんていこんねん三さい、あはれいつしかなるくらみゆづりかなと人々申あはれけり。平太なごんときたゞのきやうは、うちの御めのと、そつのすけのおつとたるによて、こんどのじやうみいつしかなりとたれかかたふけ申べき。いこくにはしうのせいわう三さい、しんのぼくてい二さい、わがてうにはこのゑのあん三さい、六てうのあん二さい、みなこれきやうほうのうちにつゝまれて、いたいたゞしふせざつしかども、あるひはせつしやうをふてくらみにつけ、あるひははゝぎみいだひてうにのぞむと見えたり。ごかんのかう(し)やうくはうていは、むまれて百日といふにせんそありて、天しのくらみをふむ。せんしうわかんかくのごとし

せんしう先蹤。

ほうきんあん  
法興院(寛一本)。

と申されければ、そのときのゆうしよくの人々、あなおそろし。ものな申されそや。さればそれはよきれいどもかとぞつぶやきあはれる。とうぐうくらゐにつかせ給ひしかば、大じやうにう道ふうふともにじゆん三ぐうのせんじをかうぶり、ねんくはんねんじやくをたまはつて、上日のものをめしつかひ、ゑかき花つけたるさぶらひでもいでいりければ、あんみやのごとくにてぞありける。しゆつけにうだうの、ちもゑいようなをつきせぬとぞ見えし。しゆつけの人のじゆん三ぐうのせんじをかうぶる事は、ほうきんぬんの大にうだうかねいゑのきやうのれいとぞうけ給る。同三月にしんぬんあきのいつくしまへ御かうなるべしとぞきこえさせ給ひける。くはうていくらゐさらせ給ひて、しよしやの御かうのはじめには、やはた、かも、かすがなんどへこそ御かうなるべきに、はるぐのにしのはて、しまぐにへわたらせ給ふ神へしも御かうなる事は、人いかにと申あへり。ある人申けるは、しら川のぬんはくまのへ御かうなる。ほうわうはひよしのやしろへ御かうなる。すでにしんぬ、ゑいりよにありといふ事を。そのうへ御心中にふかき御ぐはんあり。御むさうのつけありとぞおほせける。いつくしまは大じやうにう道あがめたてまつり給へば、うへには平家と御どうしん、したにはほうわうのいつとなくとばどのへをしこめられてわたらせ給へば、にう道の心をやはらげ給へとの御きねんのためとぞきこえし。さんもんの大しゆいきどをり申けるは、かも、やわた、かすがなんどへ御かうならずは、わが山のさんわうへこそ御かうなるべけれ。あきのいつくしままではいつのならひぞや。そのぎならばしんよをふりくだしたてまつりて御かうをとどめたてまつれとぞ申ける。これによて

しばらく御ゑんいんあり。にう道しやうこく、やうくになだめ給へば、さんもんの大しゆしづまりぬ。同三月十七日上くはういつくしまの御かどいでとて、にうだうしやうこくのにし八でうのていへいらせ給ふ。その夜やがていつくしまの御じんじはじめらる。てんがよりからの御くるまうつしのむまなどまいらせらる。その日のくれほどにさきのう大しやうむねもりのきやうをめして、みやう日いつくしま御かうの御つみでに、とぼどのへまいりて、ほうわうの御げんさんにいらばやとおぼしめすはいかに。しやうこくぜんもんにしらせずしてはあしかりなやとおほせければ、むねもりのきやうなみだをはらくとながして、なんでうこの候べきと申されたりければ、さらばむねもりまいりて、そのやうを申せかしとおほせければ、むねもりのきやう、いそぎとぼどのへはせまいりて、此よし申されたりければ、ほうわうはあまりにおぼしめす御事にて、こはゆめやらんとぞおほせける。あくる十九日大みやの大なごんたかすゑのきやういまだ夜ふかふまいりて御かうをもよをされけり。この日ごろきこえさせ給ひいつくしまの御かうをば、にし八でうのていよりとげさせおはします。ころはやよひなかばすぎぬるに、かすみにくもるありあけの月のひかりもおぼろにて、こしちをさしてかへるかり、くもゐにをとづれてゆくも、おりふしあはれにきこしめし、夜のほのくくとあけるに、しやうくはうとぼどのへいらせ給ふ。もんのうちへさしいらせ給へば、人まれにしてこぐらく、物さびしげなる御すまゐ、まづあはれにぞおぼしめす。はるすでにくれなんとす。なつこだちにもなりにけり。こずゑの花のいろおとちへて、たにのうぐひすこゑおひんだり。きよねんの正月六日ほうちう

こてい―故事。

あんきう―行宮。

じどのへてうきんのためにぎやうがうなりたるには、しよゑいちんをひき、しよきやうれつにたち、かくやにらんじやうをそうし、みんじくぎやうまいりむかつて、まんもんをひらき、かもんのかみゑんだうをしき、たゞしかりしぎしき一ツもなし。けふはたゞゆめとのみこそおぼしめせ。とう中なごんりのりまいりて、御きしよくをうかゞひ申されければ、ほうわうはしんでんのはしがくれのまに御ざありて、上くはうをまちまいらせさせ給ひけり。上くはうはこんねん廿にならせおします。あけがたの月のひかりにはえさせ給ひて、かゞやくほどにくしふぞ見え給ふ。こけんしゆんもんみんにゆゝしくにまいらせましくければ、ほうわうまづこねういんの御事をおぼしめしいだして、御なみだせきあへ給はず。御ぜんにはあまごぜばかりぞ候はれける。りやうみんの御ざちかくしつらはれたり。御もんだうの御事は人うけたまはりをやよばず。はるかに日たけて上くはうとぼどのをしゆつぎよなる。上くはうはほうわうのりきうのこてい、ゆうかんじやくまくの御ざのすまゐ、御心くるしく御らんじをかせ給へば、ほうわうはまた上くはうのりよはくあんきうのなみのうへ、ふねのうちの御ありさまおぼつかなふぞおぼしめす。ぐぶの人々は、さきのう大しやうむねもり、三でうの大なごんさねふさ、とう大なごんさねくに、五でうの大なごんくにつな、つちみかどのさいしやう中將みちゝか、てん上人には、たかくらの中將やすみち、させうべんたかふさ、くないのじうむねのりとぞきこえし。さきのう大しやうむねもりは、ずいひやう三十きめしくしげうくしふぞ見えける。まことにそうべう、やはた、かもをさしをひて、いつくしままでの御かうをば、しんめいもなどか御な



ひうびやく―表白。

うじうなかるべき。御ぐはんじやうじゆうたがひなしとぞ見えたる。同廿六日御さんちやくあつて、大じやうにうだうのさいあいのないしがしゆくしよ御所になる。なか一日御とうりうありて、きやうゑぶがくおこなはる。だうしには、三井でらのこうけんそうじやうとぞきこえし。かうざにのぼり、かねうちならし、ひうびやくのことばにいはく、まことに九のえのうちをいでさせ給ひて、八えのしほちをわけてまいらせ給ふ御心ざしのかたじけなさよとたからかに申されたりければ、君もしんもかんるいをぞもよをされける。まれうどをはじめまいらせて、やしちくしよくへみな御かうなる。大みやより五ちやうばかり山をまはつて、たきのみやへまいらせ給ふ。こうけんそう正しゆのうたをよみて、はいでんのはしらにかきつけられけり。

ほん―品。

くも井よりおちくるたきのしらいとにちぎりをむすぶ事ぞうれしき

こくしふちはらのありつな、ほんにのぼせられてかかい、じゆ下の四ほん、ゐんのでん上をゆるさる。かんぬしさいきのかげひろかかい、じゆ上の五あ、ざすそんゑいほういんになさる。しんりよもうごき、大じやうにう道の心もやはらぎぬらんとぞ見えし。同廿九日上くはう御ふねかざりてくはんぎよなる。風はげしかりければ、御ふねこぎもどし、いつくしまのうち、ありのうらにとゞまり給ふ。上くはう大みやうじんの御なごりおしみにうたつかまつれとおほせければ、たかふさのせうしやう、

たちかへるなごりもありのうらなれば神もめぐみをかくるしらなみ

やはんばかりになみもおさまり風もしづかになりければ、御ふねこぎいだし、その日はびんこ

の國しきなのとまりにつかせ給ふ。此ところはさんぬるおうほうのころ、一めん御かうのと  
き、こくしふちはらのためなりつくりたる御しよのありけるを、にうだうしやうこく御まふけ  
にしつらはれたりしかども、上くはうそれへはあがらせ給はず。こん日は卯月一日、ころもが  
えといふ事のあるぞかしとて、をの／＼みやこのかたをもひやりあそび給ふに、きしにいろふ  
かきふちのまつにさきかゝりたりけるを、上くはうゑいらんありて、たかすゑの大なごんをめ  
して、あのはなおりにつかはせとおほせければ、さししやう中はらのやすきだはしふねにのり  
て、御まへをこぎとをるをめしておりにつかはす。ふちの花をたおり、まつのだにつけなが  
らもちてまいりたり。心ばせありなどおほせられて、御かんありけり。此花にてうたつかまつ  
れとおほせければ、たかすゑの大なごん、

ちどせまで君がよはひにふちなみのまつのだにもかゝりぬるかな

その(の)ち御まへに人々あまた候はせ給ひて、御たはぶれ事のありしに、上くはうしろきき  
ぬきたるないしが、くにつなのきやうに心かけたるなどて、わらはせおはしましければ、大  
なごん大きにあらがひ申さるゝところに、文もちたるをんながまいりて、五でうの大ごんどの  
へとてさしあげたり。さればこそとて、まんざけうある事に申あはれけり。大なごんこれをと  
りて見給へば、

わすれね—まはれね  
(第一本)

しらなみのころものそでをしほりつゝきみゆへにこそたちもわすれね  
上くはう、ゆゝしふこそおぼしめせ。此返事はあるべきぞとて、やがて御すゞりをくださせ給

ふ。大なこん返事には、

おもひやれ君がおもかげたつなみのよせるたびにぬるゝそでかな

をしま  
児島(寛一本)

それよりびんごのくにをじまのとまりにつかせ給ふ。五日の日はそらはれ風しづかに、かい上  
ものどけかりければ、御しよの御ふねをはじめまいらせて、人々のふねどもみないだしつゝ、  
くものなみけぶりのなみわけしのがせ給ひて、その日のとりのこくに、はりまの國山だのうら  
につかせ給ふ。それより御こしにめして、ふくはらへいらせおはします。ぐぶの人々はいま一  
日もみやこへとくといそがれけれども、中一日しんあん御とうりうあつて、ふくはらのところ  
へをれきらんありけり。たかすゑの大なごんちよくぢやうをうけたまはつて、にう道しやう  
こくのいゑのしやうをおこなはる。やうじたんぼのかみきよくに正五ぬの下にじよす。おなじ  
くにうだうのまごゑちぜんのせう將すけもり、しぬのじゆ上とぞきこえし。七日ふくはらをい  
でさせ給ひ、その日てら井につかせ給ふ。御むかへのくぎやうてん上人、とぼのふかくさへぞま  
いられける。くはんぎよのときはとぼどのへは御かうならず。にうだうしやうこくのにし八で  
うのていへいらせ給ふ。同四月廿二日、しんてい御そくゐあり。大ごくでんにてあるべかりし  
かども、一とせゑんしやうののちは、いまだつくりいだされず。大じやうくはんのちやうにて  
おこなはるべしとさだめられたりけるを、そのときの九でうどの申させ給ひけるは、大じやう  
くはんのちやうはをよそ人のいゑにとらばくもんじよていのところなり。大ごくでんなからん  
には、しゝんでんにて御そくゐあるべしと申させ給ひければ、しゝむでんにて御そくゐあり。

をよそ人  
凡人(寛一本)

ふかくさ  
草津(寛一本)

さんぬるかうほう四ねん十一月一日、れいぜんみんの御そくみ、しゝんでんにておこなはれし事は、しゆ上御じやけにて大ごくでんへぎやうがうかなはざりしゆへなり。そのれいいかゞあるべからん、たゞゑんきうのかれいにまかせて、大じやうくはんのちやうにておこなはるべき物をと人々申あはれけれども、九でうどのゝ御はからひの上は、ちからをよばず。中ぐうこうきでんをいでさせ給ひて、にんじゆでんへうつり、たかみくらへまいらせ給ふありさまめでたかりけり。平家の人々みなしゆつしせられたりけれ共、こまつどのゝきんだちばかりは、ちゝのおとゞきよねんうせ給ひしあひだ、いまだいろにてろうきよせられたり。くらんどさゑもんごんのすけさだなが、こんどの御そくみいらなくめでたきやうこまぐゝとしるひて、にう道しやうこくのきたのかた、八でうの二みどのへたてまつり給ひたりければ、にう道も二みどのもこれを見給ひて、ゑみをふくみてぞよろこび給ひける。かやうにめでたき事どもはあつしかども、せけんはなをしづかならず。

たかくらのみやむほん

一みんだい二のわうじ、もちひとのしんわうと申は、御はゝはかゞの大なごんすゑなりのきやうの御むすめ、三でうたかくらにましゝければ、たかくらのみやとぞ申ける。御とし十五と申せしゑいまん元年十二月十五日の夜、このゑがはらの大みやの御しよにてしのびつゝ御げんぶくあり。御しゆせきいくしふあそばし、御さいかくすぐれてわたらせ給ひしかども、御けい

三十二  
三十(寛一本)。

天し―太子  
(寛一本)。

ぼけんしゆんもんぬんの御そねみにて、しんわうのせんじをだにもかうぶらせ給はず。はなの  
もとの春のあそびには、しがうをふるつて手づから御せいをかき、月のまへのあきのゑんに  
は、ぎよくてきをふひて、みづからがいんをあやつらせたまひけり。かくてあかしくらし給ふ  
ほどに、おしう四年には三十二にぞならせまし／＼ける。おしう四年う月九日の夜、このゑが  
はらに候ける源三ゐにう道、此御しよへまいりて申ける事こそおそろしけれ。きみは天しう大  
神四十八せの御すゑ、じんむ天わうより、七十七だいの御みやにてわたらせ給ふ。いまは天し  
にもたゝせ給ふべきに、いまだしんわうのせんじをだにもかうぶらせ給はず。みやにてわたら  
せ給ふ事をば、心うしとはおぼしめさずや。此世の中のありさまを見候に、うへにはしたがひ  
たるやうに候へども、したには平家をそねまぬものや候。されば君御むほんをおこさせ給ひ  
て、世をしづめ、くらゐにつかせ給へかし。又ほうわうのいつとなくとばどのにをしこめられ  
てわたらせ給ふをも、やすめまいらせ給へかし。これ御かう／＼の御いたりにてこそ候はんず  
れ。しんめいさんぼうもなごかは御なうじゆなかるべき。君まことにおぼしめたつて、れい  
しをしよこくへくださせ給ふ物ならば、よろこびをなしてはせまいらんずるげんじどもこそ國  
々におほく候へとて申つゞく。京とにはまづではのぜんじみつのぶがこども、いがのかみみつ  
とも、ではのくらんどみつなが、ではのはんぐはんみつしげ、ではのくはんじやみつよし、  
くまのにはこ六でうのはんぐはんためよしがすゑのこ、十郎よしもりとてかくれて候。つのく  
にゝは、たゞのくらんどゆきつなこそ候へども、しん大なごんりちかのきやうのむほんのと

くらんど―  
判官(寛一本)。

あさねー  
知実（覺一本）。

ようはるー  
義治（覺一本）。

同三郎しげずみ  
ーなし（覺一本）。

たんみー逸見  
（覺一本）。

き、どうしんしながらかへりちうしたるふたうじんで候へば申にをよばず。さりながらも、そのおとくゝにたゞの次郎あさね、てしまのくはんじやたかより、おぼたの太郎よりもと、かはちの國には、むさしのごんのかみにう道よしもと、しそくいしかはのはんぐはんたいよしかね、やまとの國には、うのゝ七郎ちかはるがこ共、太郎ありはる、次郎きよはる、三郎なりはる、四郎よりはる、あふみの國には、山もと、かしは木、にしごり、みのおはりには、山だ次郎しげひろ、かはべの太郎しげなを、いづみの太郎しげみつ、う（ら）のゝ四郎しげとを、あじきの二郎しげより、そのこ太郎しげすけ、同三郎しげずみ、きだの三郎しげなが、かいだのはんぐはんたいしげくに、やじまのせんじやうしげたか、そのこ太郎しげゆき、かひのくにゝは、たんみのくはんじやよしきよ、そのこ太郎きよみつ、たけだの太郎のぶよし、かゞみの次郎とをみつ、同小次郎ながきよ、一でうの次郎たゞより、いたがきの三郎かねのぶ、へんみのひやう衛ありよし、たけだの五郎のぶみつ、やすだの三郎よしさだ、しなのゝ國には、おほ（う）ちの太郎これよし、をかだのくはんじやちかよし、ひらがのくはんじやもりよし、そのこ四郎よしのぶ、たちはきせんじやうよししかたがじなん、きそのくはんじやよしなか、いづの國には、るにんさきのひやう衛のすけよりとも、ひたちの國には、しだの三郎せんじやうよし、さたけのくはんじやまさよし、そのこ太郎たゞよし、同三郎よしむね、四郎たかよし、五郎よしすゑ、むつのくにゝは、こさまのかみよしとものすゑのこ、九郎くはんじやよしつね、これみな六そんわうのべうゑい、たゞのまんぢうがこういんなり。てうてきをもた

ひらげ、しゆくばうとげし事は、源平いづれもとりまさはなかりしかども、いまはうんでいのまじはりをへだて、しうぐのれいにもなをとれり。國にはこくしにしたがひ、しやうにはりやうけにつかはれ、くうじざうじにかりたてられて、やすき心も候はず。いかばかりか心うく候らん。君もしおぼしめした、せ給ひて、りやうじを給りつる物ならば、夜を目につゐではせのほり、平家をほろぼさん事、じゝつをめぐらすべからず。にう道こそとしよつて候へども、こどもひきぐしてまいり候べしとぞ申ける。みやは此事いかゝあらんとて、しばしは御しういんもなかりしかども、あこ丸の大なごんむねみちの卿のまご、びんごのぜんじすゑみちがこ、せうなごんこれながと申せしは、すぐれたるさうにんなりければ、ときの人、にんさうせうなごんとぞ申ける。その人此みやを見まいらせて、くらゐにつかせ給ふべきさうまします。天下の事おぼしめしはなたせ給ふべからずと申けるうへ、源三ゐにう道もかやうに申されければ、しかるべきてんしう大じんの御つけやらんとて、ひしゝとおぼしめした、せ給ひけり。くまのに候十郎よしもりをめて、くらんどになされ、ゆきいゑとかいみやうして、りやうじの御つかひにとうごくへぞくだされける。同四月廿八日みやこをたつて、あふみよりはじめて、みのおはりの源氏共にしだいにふれてゆくほどに、五月十日にはいづのほうちうにくだりつきて、さきのひやう衛のすけどのにたいめんして、りやうじたてまつる。しだの三郎せんじやうよしのりにとらせんとて、ひたちの國しだうきじまへくだる。木そのくはんじやよしなかはおみなればたばんとて、とうせんだうへぞおもむきける。そのころくまのゝべつたうたん

たかぼう―  
高坊（覺一本）。

ぞうは、平家に心ざしふかかりけるが、なにとしてかまれきこえたりけん、しんぐうの十郎ゆきもりこそ、たかくらのみやのりやうじ給はつて、みのおはりの源氏共ふれもよをし、すでにむほんおこすなれば、なちしんぐうのもの共は、げんじのかたふどをぞせんずらん。たんぞう平家の御おん、あめ山とかうぶりたれば、いかでかそむきたてまつるべし。なちしんぐうのもの共に、や一ツいかけて、平家へしさいを申さんどて、ひたかぶと一千人、しんぐうのみなどへはつかうす。しんぐうには、とりめのほうげん、たかぼうのほうげん、さぶらひには、う井、すゞき、みづや、かめのこう、なちには、しゆぎやうほういんい下、つがうそのせい二千よ人なり。ときつくりやあはせして、源氏のかたにはとこそいられ、平家のかたにはかくこそいられて、やさけびのこゑのたいてんもなく、かぶらのなりやむひまもなく、三日かほどこそたゝかふたれ。くまのゝべつたうたんぞう、いゑのこらうどうおほくうたれ、わがみてをひ、からきいのちをいきつゝ、ほんぐうへこそにげのぼりけれ。

さるほどにほうわうは、なりちかしゆんくはんがやうに、とをきくに、はるかの上へもながしやせんずらんとおぼしめしけれ共、せいなんのりきうにうつされて、ことしは二ねんにならせ給ふ。同五月十二日むまのこくばかり、御しよ中にいたちおびたゞしふ、はしりさはぐ。ほうわう大きにおどろきおぼしめして、御うらかたをあそばめて、あふみのかみ中かね、そのころはいまだくらんどにて候はれけるをめして、此うらかたもちてやすちかゞもとへゆき、きつとかんがへさせて、かんじやうをとつてまいれとぞおほせられける。中かねこれを給はつて、



しるし仰せ  
(覺一本)。

たへふしたりふし  
(覺一本)。

しよくじ職事。

中しやう  
弁(覺一本)。

おんみやうのかみやすちかゞもとへゆく。おりふししゆく所にはなかりけり。しら川なるところへといひければ、それへたづねゆき、ちよくぢやうのおもむきをしるしければ、やすちかがてかんじやうをまいらせける。中かねとぼどのへかへりまいりて、もんよりまいらんとすれば、しゆごのふしどもゆるさず。あんないはしりたり。つあぢをこえ、大ゆかの下をへて、きりいたよりやすちかゞかんじやうをこそまいらせたれ。ひらひて御らんずるに、いま三日のうちの御よろこびならびに御なげきとぞ申ける。ほうわう御よろこびはしかるべし、これほどの御身となりて、又いかなる御なげきのあらんずらんとぞおほせける。さるほどにさきのう大しゆうむねもりのきやう、ほうわうの御事をたへふし申されければ、にう道しやうこく、やうくにおもひなをひて、同十三日とぼどのをいだしたてまつり、八でうからす丸、びふくもんおんへ御かうなしたてまつる。いま三日がうちの御悦とは、やすちかゞこれをぞ申ける。かゝりけるところにくま野のべつたうたんぞうひきやくをもつて、たかくらのみや御むほんのよしみやこへ申たりければ、さきのう大しやうむねもり大きにさはひで、にう道しやうこくおりふしふくはらにおはしけるに、此よし申されたりければ、きゝもあえず、やがてみやこへはせのぼり、ぜひにをよぶべからずたかくらのみやからめとつて、とさのはたへながせとこそその給ひけれ。上きやうには、三でうの大なごんさねふさ、しよくじは、とうの中しやうみつまさときこえし。をつたてのくはんになには、げん太夫はうぐはんかねふさ、ではのはんぐはんみつながうけ給はつて、みやの御しよへぞむかひける。源太夫はうぐはんと申は、三ゐにう道のや

しうそこ―消息。

うじなり。しかるを此人じゆにいられける事は、たかくらのみやの御むほんを、三めにう道すゝめ申されたりと、平家いまだしらざりけるに由なり。三めにう道これをきゝ、いそぎみやへしうそくをこそまいらせけれ。

のぶつらかつせん

さ大夫―亮大夫  
(寛一本)。

みやは五月十五夜のくもまの月をゑいぜさせ給ふところに、三めにう道のつかひとて、いそがしげにてしうそくもちてまいりたり。みやの御めのと、六でうのさ大夫むねのぶ、これをとりて御まへにまいり、わな／＼とよみあげたり。君の御むほんすでにあらはれさせ給ひて、くはんにんどもたゞ今御むかへにまいり候なり。いそぎ御しよをいでさせ給ひて、をんじやうじへいらせ給へ。にう道もこどもひきぐし、やがてまいり候はんとぞかひたりける。みやは、こはいかゞすべきとて、さはがせおはします。ちやうひやう衛のじうのぶつらといふさぶらひ申けるは、べちのやうや候べき。女ばうのしやうぞくをからせ給ひていでさせましますべふ候と申ければ、げにもとて、かさねたるぎよゐに、いちべがさをぞめされける。さ大夫むねのぶたゝれにたまだすきあげて、からかさをもちて、御ともつかまつる。つる丸といふわらはふくろに物いれていたゞきたり。あをさぶらひのをんなをむかへてゆくやうにもてなしたてまつる。たかくらのにしのこもんよりいでさせ給ひて、たかくらをのぼりにおちさせ給ふ。みぞのありけるを、みやのいと物からくさつとこえさせ給ひければ、みちゆき人がたちとゞまつて、あな

はしたなの女ばうのみぞのこえやうやとて、あやしげに見たてまつりければ、いとゞそこをあしばやにすぎさせおはします。ちやうひやう衛は、御しよの御るすに候けるが、たゞ今くはんにんどもがまいりて見んずるに、見ぐるしき物共とりおさめんとて見るほどに、みやのさしも御ひざうありけるこえだときこえしふゑを、たゞいましもつねの御まくらにとりわすれさせ給ひけるぞ、ひしと心にかゝりける。ちやうひやう衛これを見て、あなあさましや、さしも御ひざうありし御ふゑをと申、たかくらおもてのこもんをはしりいで、五ちやうがうちにてをつつきまいらせて、たてまつりければ、みやはなのめならず御悦あり。われしなば此ふゑをあひかまへて御くはんにいれよとぞおほせける。やがて御ともつかまつれとおほせられければ、ちやうひやう衛、もつとも御ともこそつかまつりたく候へ共、たゞいまくはんにんどもが御むかひにまいり候なるに、御しよ中に一ことばあひしらふもの候はでは、あまりにうたてしくおぼえ候。そのものにては候はねども、あの御所には、ちやうひやう衛のぶつらが候に、こよひ候はずんば、それもその夜にげたりなんど申されん事、ゆみやとる身のならひは、かりにもなこそおしふ候へ。一ことばあしらひて、やがてまいらんとて、いとま申てはしりかへる。三でうおもてのそうもんをも、たかくらおもてのこもんをも、ともにひらひて、たゞ一人まつところに、夜はんばかりに、ではのはんぐはん、源太夫はんぐはん、つがう三百きばかりにてをしよせたり。源太夫はんぐはんぞんずるむねありとおぼえて、もんぜんにしばらくひかへたり。ではのはんぐはんむまにのりながら、にはにうちいれて申けるは、君の御むほんすでにあらはれ

させ給ひて、くはんにんども御むかへにまいり候と申せば、ちやうひやう衛のじう、これをきゝ、なに事にて候やらん。たうじは此御しよにては候はずと申せば、ではのはんぐはん、なんでうこれならではいづちへわたらせ給ふべきか。そのぎならば、しもべどもまいりて御しよ中をさがしたてまつれとぞ申ける。ものもしらぬやつばらが申やうかな。むまにのりながらていじやうにまいるだにもきくはいなるに、しもべどもまいりてさがしたてまつれとは、なんぢらいかでか申べき。日ごろはをとにもきゝ、いまはめにも見よ。さひやう衛のじうはせべののぶつらといふものぞや。ちかふよりてあやまちすなどぞ申ける。源太夫これをきゝ、おめひてかけ入。しもべのなかに、かねたけといふ大ぢからのかうのものあり。大なぎなたのさやはづし、のぶつらにめをかけてきつてあがれば、どうるいども十四五人ぞつゝゐたる。のぶつらはかりぎぬのしたにはらまきをきて、ゑふのたちをぞはいたりける。しもべどもきつてのぼるを見て、のぶつらかりぎぬのをびひぼをひつきつてなげすて、ゑふのたちをぬひてきつてまはるに、おもてをあはするものぞなき。のぶつら一人にきりたてられて、あらしに木のはのちるやうにはにさつとぞおりたりける。さみだれのころなれば、一むらさめのたえまに月のいでけるに、てきはふちあんないなり。わが身はあんないしやなれば、こゝのめんらうにをつかけてははたときり、かしこのつまりにをつこめてはちやうどきり、きつてまはれば、せんじの御つかひをばいかでかかうはするぞと申せば、せんじとはなにぞとて、たちゆがめはおどりのゐてふみなをしをしなをし、たちどころにくきやうのもの十五人ぞきりふせたる。たちのきつさき

五寸―三寸（寛一本）。

てづかの八郎―  
なし（寛一本）。

五寸ばかりうちおりてすてゝけり。いまはじがひせんとて、こしをさぐればさやまきはおちてなかりけり。たかくらおもてのこもんに人もなきまにはしりいでんとするところに、しなのの國のぢう人に、てづかの八郎といふもの、なぎなたもちてよりあふたり。のらんとんでうちかゝりけるに、のりそんじて、もゝをぬみさまにつらぬかれて、のぶつら、心はたけくおもへども、いけどりにこそせられけれ。そののち御しよ中をさがしたてまつれども、宮はわたらせ給はず。のぶつらいけどられて、六はらへぐしてまいり、つばにひつすゑたり。さきのう大しやう大ゆかにたつて、いかになんぢらはせんじとはなにぞとてきりたりけるぞ。なんぢがせんじの御つかひあつこうし、ちやうのしもべにんじやうせつがいきくはいなり。しさいをめしとひてそのゝちかはらへひきいだし、くびをはね候へ、人々とぞの給ひける。のぶつらあざわらひて申けるは、さん候。あの御しよを、よなくものがおそひ候ほどに、もんをひらみてまつところに、夜はんばかりによろふたるものが二三百き、にはにむれ入ひかへて候あひだ、なものぞとひつれば、せんじの御つかひと申候つるあひだ、がうたうなど、申やつばらは、あるひはきんだちのいらせ給ふ、あるひはせんじの御つかひぞなんど、申候と、ないゝうけ給りをよび候ほどに、せんじとはなにぞとてきつて候。てんせい日ほんこくをてきにひきうけさせ給はんずる宮の御さぶらひとして、ちやうのしもべにんじやうせつがいはいはこともおろかに候や、かねよきたちをだにもちて候しかば、くはんにんどもをあんおんにはよも一人もかへし候はじ。みやの御ざいしよいづくともしりたてまつらず。たとひしりたてまつり候共、さぶらひ

ほどのものが申さじとおもひきりぬる事をば、きうもんによつて申べきやうや候らん。のぶつらみやの御ゆへにかうべをはねられん事は、こんじやうのめんぼく、めいどのおもひでに候と申て、そのゝちはものもいはず。平家のらうせうなみあたりけるが、あはれかうのもののゝてほんなり。あたからおのこのきられんずらんむざんやとておしみあへり。そのうちにあるものが申けるは、せんねん御しよのしゆにつらなつてありしとき、おほばんしゆがとめかねたりしがうたう六人を、たゞ一人してをつかり、四人はやにはきりふせ、二人いけどりにして、そのときなされたるさ兵衛のじうぞかし。あれこそ一人たうせんとも申さんずらんなどと、くちぐに申せば、う大しやう、さらばしばしなきりそとて、その日はきられず、にう道もおしふやおもはれけん、おもひなをりたらば、のちにはたうけにほうこうもいたせかしとて、ほうきのひのへぞながされける。そのゝちげんじのよとなりて、かまくら殿よりどひの二郎さね平におほせてたづねいだし、かまくらへまいりて、ことのやうはじめよりしだいにかり申せば、かまくら殿心ざしのほどをあはれみて、のとの國に御おんありけるとぞきこえし。

## きおう

みやはたかくらをのぼりに、この衛かはらをひがしへ、かはをわたらせ給ひて、によぬ山へかゝらせまします。いつならはせ給ふべきなれば、御あしかけそんじてはれたり。ちあえていたはしふぞ見えさせ給ひける。しらぬ山ちをよすがらわけすぎさせ給へば、なつ山のしげみが

せばくせう  
(覺一本)

もとのつゆけさも、さこそそころせばくおぼしめされけん。とかうしてあかつきがたに、をんじやうじへこそいらせ給ひけれ。かひなきいのちのおしさにしゆとをたのみきたれりとおほせられければ、大しゆうけ給はつて、ほうりんみんに御しよしつらひていれまいらせけり。あくれば十六日、たかくらのみやの御むほんおこしてうせさせ給ひぬと申ほどこそありけれ、みやこのさうどうおびたゞし。ほうわう三日のうちの御悦ならびに御なげきとやすちかゞかんがへ申たりしは、これを申けるにこそと、御なみだにむせびおはします。としごろ日ごろもあればこそあれ、源三みにう道ことしはいかなる心にて、かやうにむほんをおこしたりけるぞといふに、さきのう大しやうむねもり、ふしぎの事し給へり。されば人の世にあればとて、すまじき事をし、いふまじき事をいふは、よくくしりよあるべき事なり。たとへばそのころ源三みにう道のちやくし、いづのかみなかつながもとに、九えにきこえたるめいばあり。かげなるむまのならびなきいちもつなり。なをばこの下とぞいひける。さきのう大しやう、ししやをたて給ひて、きこえ候このしたを見さぶらはばやとの給ひつかはされたりければ、のりそんじ候あひだ、このほどこいたはらんがためにいなかへつかはして候。やがてめしこそそのぼせ候はんと返事せられたりければ、う大しやう、さらばちからにをよばすとおはしけるところに、平家のさぶらひなみあたりけるが、あるものが、あはれそのむまは一さく日まではありつる物をと申、又あるものが、昨日もさぶらひし物を、けさにはのりさぶらひつるなんとくちぐに申せば、う大しやう、にくし、さてはおしむござんなれ、そのぎならば、そのむませめこひにこへやとて、さ

ぶらひしてはしらせ、文などしてをしかへし／＼五六どまでこそはれけれ。三めにう道これ  
をきゝて、いづのかみをよびて、たとひこがねをまろめたるむまなりとも、それほどに人のこ  
はんにおしむやうやあるべき。そのむますみやかに六はらへつかはせとありければ、いづのか  
み、むまをおしむにては候はず。けんゐについてせめらるゝとおもへば、ほみなふ候ほどにこ  
そつかはし候はねとて、やがてこの下を六はらへつかはすとて、うたをぞ一しゆそへられける、  
こひしくばきても見よかし身にそへるかげをばいかにはなちやるべき

う大しやううたの返しをばしたまはで、此むまをひきまはし／＼見るべきほど見て、にくし、  
さしもにこれをばぬしがおしみたるむまぞかし。やがてぬしがなのりをかねやきにし候へと  
て、なかつなといふやきじるしをしてぞをかれける。きやく人きたりて、きこえ候この下を見  
さぶらはばやと申せば、う大しやう、中つなめが事に候や。中つなめひきいだせ、なかつなめ  
うてはれなんどぞの給ひける。いづの守これをきゝ、むまをばいつかはうつとはいへども、は  
るといふ事をきく事なし。いのちにもかえておしかりつるむまを、けんゐにつめてとられつる  
だにやすからぬに、むまゆへなかつながけふあす日ばんこくのわらはれぐざとならん事こそほ  
ゐなけれ。はぢを見んよりはしをせよと申事の候ものをとの給へば、ちゝにう道これをきゝ、  
げにもそれ程に人にいはれていのちいきてせんあるまじ。しよせんはびんぎをうかゞふ身にて  
こそあらめとてありしほどに、さすがにわたくしにはえおもひたゞずして、みやをすゝめまい  
らせたりけるとかや。これにつけても天がの人こまつどのゝ事をぞ申されける。あるときこま



とのい—直衣  
(覺一本。)

つどのさんだいのつゐでに、ちうぐうの御かたへまいり給ひけるに、四五しやくあるくちなはおとゞのさしぬきのひだりのりんをはひまはりけるを見給ひて、しげもりさはがば女ばうたちもさはぎ、又中ぐうもおどろかせ給ひなんずとおもひ給ひて、みぎのてにてくちなはのかしらををさゑ、ひだりのてにておををさへ、とのいのそでのうちにひきいれて、御まへをつゐたつてあゆみいでられけり。六ゐや候くゝとめされけれ共、おりふし人もなかりけり。いづのかみそのとき、ゑふのくらんどにてさぶらはれけるが、中つな候となのりてまいられたりければ、此くちなはをたぶ。ゆぼどのをへて、てん上のこにはい、みくらのことねりをめして、これを給はれとありければ、かしらをふつてにげさりぬ。わたなべのきおうたきぐちをめしてこれをたぶ。きおうたまはつてすてゝけり。そのあしたこまつどのよきむまにくらをひて、たち一ふりそへて、中つなのもとへつかはさるゝとて、きのふのふるまひこそゆゝしく見えられ候しか。これはのりいちのむまにて候。やいんにをよびけいせいのもとへかよはれむとき、もちひらるべしとて、中つなへつかはさる。御返事には、六ゐのつかひなれば、御むまかしこまつて給り候ぬ。又昨日のふるまひは一かうげんじやうらくにこそにて候しかとぞ申されける。いかなればあにのこまつ殿はかやうにこそおはするに、おとゞのむねもりは人のむまをせめとつて、天がの大事にをよびぬるこそあさましけれ。

同十六日夜に入て、源三ゐにう道いゑのこらうどうひきぐして、つがうそのせい三百き、やかたにひをかけて三井でらにはせまいる。わたなべのたきぐちがしゆく所は六はらのうらのひが

きのうちにてぞありける。きおうがはせをくれてとゞまつて候よしをう大しやうき、給ひて、あくる十七日のさうてうにししやをたてめされければ、きおうめしによつてまいりたり。う大しやういであひたいめんし給ひて、いかになんちはさうでんのしう三めにう道のともをせずとゞまりたる、ぞんずるむねあるかとの給へば、きおうかしこまつて申けるは、ひごろはなに事候はゞ、まつさきかけてうちじにせんとこそぞんじ候つるに、こんどはなにとおもはれ候けるやらん、つゐにかうとしらせられず候。此うへはあとをたづねてゆくべきにても候はねば、かうて候とぞ申ける。としごろなんちが此へんをいで入するをめしつかはばやとつねにおもひしに、さらばたうけにほうこういたせかし。三めにう道のおんにはすこしもをとるまじとの給へば、きおうかしこまつて申けるは、たとひ三めにう道ねんらいのよしみ候とも、てうてきとなられたる人にぬかでかどうしんをばつかまつり候べき。こん日よりはたうけにほうこうつかまつらんと申せば、う大しやう、よにもうれしげにて入給ひぬ。その日はきおうがあるかゝとて、あさよりゆふべまでしこうす。すでに日もやうくくれければ、きおう申けるは、みやならびに三めにう道すでに三井寺にとうけ給候。さだめていまはうちてをむけられ候はんずらん。三井でらほうし、わたなべにはそんちやうそれなんぞ候らめ。きおうはゑりうちなんどつかまつるべふ候。のりてこにあふべきむまの候つるを、したしきやつばらにぬすまれて候。御むま一びきくだしあづからばやと申ければ、う大しやういかにもしてありつけばやとおもはれければ、しらあしげなるむまのふとくたくましきが、なんりやうとつけてひぎうせら

きやうもんー狂文。ひ  
やうもん。

れたるに、しろふくりんのくらをひて、きおうにたぶ。此むまをたまはつてしゆく所にかへり、はや／＼とくして日のくれよかし、三井でらへはせまいりて、三ゐにう道どのゝまつさきかけてうちじにせんとぞおもひける。しだいに日もくれければ、さいしどもしのばせ、わが身はみづにちどりをしたるきやうもんのかりぎぬに、きくとちおほきにきらやかにしたるをき、ちうだいのきせなが、ひおどしのよろひきて、いかものづくりのたちをはき、大なかぐろのやかしらだかにをひなし、ぬりごめどうのゆみのまつ中とり、たきぐちのこつばうわすれずして、まとや一てぞさしそへたる。給りたりけるなんりやうにうちのかえりて、のりかえ一びきぐし、とねりのおとこにもたちわきばさませて、やかたにひをかけ、三井でらにはせまいる。きおうがやかたよりひいできたれりと申ほどこそありけれ、六はら中さうどうす。う大しやう、きおうはあるかどたづねられければ、候はずとぞ申ける。すはきやつにだしぬかれけるよ。やすからぬ物かなと、こうくはいし給へどもかひぞなき。三井寺にはおりふしきおうがさたあつて、あはれきおうをめしぐせらるべきものを、すでにすてをかせ給ひて、いかなるめにとらへからめられなるとくち／＼に申せば、にう道心をやしり給ひけん、そのものむたいにとらへからめられなるとはよもせじ。いま見よまいらんするぞとの給ひもはてねば、まいりたり。にう道さればこそとて、よろこばれけり。きおうかしこまつて申けるは、いづの守のこの下がかはりにう大しやうどのゝなんりやうをこそとつてまいりて候へと申せば、いづのかみ大きによるこびて、此馬をこひて、やがてむねもりといふかねやきをさして、そのあした六はらへつかはし、もんのうち

へぞをひ入たる。さぶらひども此馬をとつてまいりたり。う大しやう此馬を見給へば、むねも  
りといふかねやきを見給ひて、おほきにいかられけり。こんど三井でらによせたらんずるに、  
よはしらずあひかまへてまづきおうをいけどりにせよ。のこぎりにてくびをきらんとぞの給ひ  
ける。

## てうじやう

こんどこの時  
(覺一本)。

からう……夏極得度の  
戒場。

三井でらにはいかねをならし、大しゆおこつてせんぎしけるは、そも／＼きん日せ上のてい  
をあんずるに、ぶつぼうのすいび、わうほうのらうろう、こんどにあたれり。いまきよりに  
うだうがぼうあくをいましめずんば、いづれの日をかごすべき。こゝにみやじゆぎよの事は、  
正八まん大ぼさつ、しんら大明神のみやうじよにあらずや。天じんぢるいもやうがうし、ぶつ  
りよしんりよもがうぶくをくはへましまさん事、なじかはなかるべき。そも／＼ほくれいはゑ  
んしう一みのがくち也。なんとは又からうとくどのかいちやうなり。てうそうのところになど  
かくみせざるべきと、一みどうしんにせんぎして、山へもならへもてうじやうをつかはす。ま  
づさんもんのてうじやうにいはいはく、

をんじやうじてうすゑんりやくじのが、ことにがうりよくをいたし、たうじのぶつぼうはめ  
つをたすけられんとほつするのじやう、みぎにう道じやうかいほしひまゝにぶつぼうをうし  
なひ、わうほうをほろぼさんとほつす。しうたんきはまりなきのあひだ、さんぬる十五日の

きうもん一教門。

夜、一みんだい二のわうじ、ふりよのなんをのがれんがために、ひそかにうじせしむ。こゝにみんぜんとうし、くはんぐんをはなちつかはすべきのむねそのきこえありといへども、あへていだしたてまつるにあたはず。たうじのはめつまさにこのときにあたり。ゑんりやくをんじやうりやう寺は、もんぜきふたつにあひわかるといへども、まなぶところはこれゑんしう一みのきうもんなり。たとへばとりのさうのつばさのごとく、又はくるまのりやうわににたり。一ばうかくるにをひては、いかでかそのなげきならんや。ていればことにがうりよくをいたし、たうじのぶつぼうはめつをたすけられ、はやくねんらいのいこんをわすれ、かさねてちうさんのむかしにぶくせん。しゆぎかくのごとし。よつててうくだんのごとし。ちしう四年五月日

とぞかゝれたる。

さんもんにはこれをひけんして、こはいかに、たうぎんのまつじとして、とりのさうのつばさのごとく、くるまのりやうわににたりとをしかくでう、らうぜきなりとて、へんてうををくらずとぞきこゑし。そのうへ平家あふみごめ一まんごく、ほつこくのをりのべぎぬ三せんびき、山のわうらいによせらる。これをたにくみねくにひかれけるに、にはかの事ではあり、一人してあまたとる大しゆもあり、又てをむなしくして、一ツもとらぬしゆともあり。なにもものゝしわざにやありけん、らくしよをぞしたりける。

山ほうしをりのべぎぬのうすくしてはちをばえこそかくさざりけれ

又はいふんにもあたらず大しゆのよみたりけるやらん。

をりのべのひときれもえぬわれらさへうすはちをかくかずにいるかな

ざすどうしんして、をんじやうじ一みはしかるべからざるよしこしらへ給へば、みやのかたへはまいらざりける。なんとこのてうじやうにいはく、

をんじやうじてうす、こうぶくじのが、ことにがうりよくをかうぶつてたうじぶつほうはめつをたすけられんとこふのじやう、みぎぶつほうしゆしうなる事は、わうほうをまばらんがためなり。わうほう又ちやうきうなる事は、すなはちぶつほうによるなり。こゝにきやうねんよりこのかた、にう道さきの大じやう大じんたいらのきよもり、ほしひまゝにわうほうをうしなひ、てうせいをみだる。ないげにつけうらみをなし、なげきをなすのあひだ、さんぬる十五(日)の夜、一みんだい二のわうじ、ふりよのなんをのがれんがために、にはかにうじせしめ給ふ。こゝにみんぜんとがうし、くはんぐんをはなちつかはすべきのむね、そのせめありといへども、しゆと一かうこれをおしみたてまつる。よつてかのぜんもんぶしをたうじにいれんとほつす。ぶつほうといひ、わうほうといひ、一じにまきにはめつせんとす。しよしゆなんぞしうたんせざらんや。むかしたうのゑしやうてんし、ぐんびやうをもつてぶつほうをめつせんとせしむるとき、せいりやうさんのしゆと、かつせんしてこれをふせぐ。

しよしゆ―諸衆。

むれいむざい―無例無罪。

何いはんやむほん八ぎやくのともがらにをひてをや。なかんづくなんきやうはむれいむざいちやうじやをはいるせらる。こんどにあらずんば、いづれの日にかくはいけいをとげんや。

ねがはくはしゆと、うちにはぶつぼうのはめつをたすけ、ほかにはあくぎやくのたぐひをしりぞけ、てひれば、どうしんのいたり、ほんくはいにたんぬべし。よつててうくだんのごとし。おしう四年五月日

とぞかゝれたる。

なんとにはどう大こうぶくりやうじの大しゆせんぎして、やがてへんてうをぞをくられける。

こうふくじのてう、をんじやうじのが、らいてう一しにのせられたり。にう道しやうがいがために、きじのぶつぼうをほろぼさんとするのよしの事をてうす。ぎよくせんぎよくくは、りやうけのしうぎをたつるといへども、きんしやうきんく、おなじく一だいのきうもんよりいづ。なんきやうほつきやうともにによらいのでしたり。じじたじたがひにちうだつ（が）ましやうをふくすべし。そもくきよもりにう道は、へいしのさうかう、ぶしのちんかいなり。そぶまさもりくらんど五ぬににんじ、しよこくじゆりやうのむちをとる。大くらのきやうためふさ、かせうしし（の）いにしへ、けんびいしにふせらるゝのところに、しゆりの大夫あきすへはりまの大しゆとして、むかしむまやのべつたうしよくににんず。しかるにしんぶただもり、しうでんをゆるされしとき、とひのらうせうみなほうこのかきんをそねむ。ないく（は）いのゑいがう、をのくばだいのしんもんになく。ただもりせいうんのつばさをかひつくろふといへども、よのたみなをはくおくのたねをからんず。なをおしむあをさぶらひは、そのいゑにのぞむ事なし。しかるにへいち元年十二月、のぶよりよしとむついたうせ

きやうん―教文。

ちうだつ―調達。

かせう―加州。

じゆ上ぐう―淮后。

ぐんたいそし―群弟庶子。

くはうくう―王侯  
(覺一本)。

七かう―膝行。

くはんく―宮々。

くはうけん―繪言  
(覺一本)。

しとき、だい上天わう、一せんのことをかんじて、ふじのしやうをさづけ給ひしよりこのかた、たかくしやうこくにのぼり、かねてひやうちやうをたまはる。なんそあるひはだいくはいをかうぶり、うりんにつらなる。によしあるひは中ぐうしよくにそなはり、あるひはじゆ上ぐうのせんじをかうぶる。ぐんたいそし、みなきよくろにあゆむ。そのまごそのおひ、ことぐくちくふをさく。しかのみならず九しうをとうりやうし、はくしをしんだいす。みなぬひぼくじうとなり、一もうも心にたがへば、くはうくうといへどもこれをとらへ、へんげんもみにさかへば、くぎやうといへどもこれをからむ。こゝをもつてあるひは一たんのしんめいをのべんがため、あるひはへんじのりうじよくをのがれんがため、ばんじうのせいしゆなをめんてんのこびをなす。ぢうだいのかくんかへつて七かうのれいをいたす。だいくさうでんのかりやうをうばふといへども、じやうさいもをそれてしたをまき、くはんくさうじうのしやうゑんをとるといへども、けんぬにはゞかりてものいふ事なし。かつにのるのあまりに、きよねんのふゆ十二月、たい上くはうていのすまゐをついふくし、はくろくこうの身ををしながらしてまつる。ほんぎやくのはなはだしき事こんにたへたり。そのときわれらすべからくぞくしゆにゆきむかつて、そのとがをとふべしといへども、あるひはしんりよにはゞかり、あるひはくはうけんをしうするによつて、うつきうをさへてくはういんををくるのあひだ、かさねてぐんぴやうをおこし、一みんだい二のみやのしゆかうをしかこみたてまつる。八まん三しよ、かすが大明神ひそかにやうがうをたれ、せんひ(つ)をさゝ



きうき―凶気。

ひつそう―悲痛。

りやうちん―

染園（髷一本）。

げたてまつり、きじにをくりつけ、しんらのとぼそにあづけたてまつる。わうほうつくべからざるのよしあきらけし。したがつてきじしんめいをすてしゆごしたてまつるのでう、がんしきのたぐひ、たれかずいきせざらん。われらゑんいきにあつて、そのじやうをかんずるところに、きよもりにう道なをきうきをおこして、きじにいらんとするのよし、ほのかにうけ給りをよぶ。かねてようゐをいたし、十八日たつの一てんに大しゆをおこして、十九日しよじてうそう、まつじにげちして、ぐんしゆをえてのちに、あんないをのべんとほつするのところに、せいてうとびきたつてはうかんをつうず。すじつのうつねん一じにかいさんす。かのたうかのせいやう一さんのひつそう、なをぶそうのくはんべいをかへす。いはんやわこくなんぼくのりやうものしゆと、なんぞぼうしんのじやういはらはざらん。よくりやうちんさうのちんをかためて、よろしくわれらしんぼつのつげをまつべし。じやうをさつし、ぎたいをなす事なかれ。もつててうくだんのごとし。おしう四年五月日とぞかきたりける。

### 三井でら大しゆそろひ

同廿三日の夜にいりて、源三ゐにう道みやの御まへにまいり申けるは、さんもんはかたらひあはれず、なんとはいまだまいらず。ことのびてはかなふまじ。こよひ六はらへをしよせ、ようちにせんとぞんずるなり。そのぎならば、らうせうせんよにんはあらんずらん。らうそうどもは

によいがみねよりからめてにまいるべし。わかきもの共一二百人は、さきだつてしら川のざいけにひをかけて、くだりへやきゆかば、京六はらのはやりおのもの共、あはやこいでくるとて、はせむかはんずらむ。そのときいはさか、さくらもとにひつかけく、しばしさゝゑてふせがんあひだに、わか大しゆども大てより、いづのかみ大しやうとして、六はらへをしよせ、かざかみよりひをかけ、一もみもふでせめんずるに、なじかは大じやうにう道やきいだしてうたざるべきとぞ申されける。さるほどにやがて大しゆおこつてせんぎしけり。そのうちに平家のいのりしける一によぼうあじやりしんかいといへるらうそうあり。せんぎのにはにすゝみいでゝ申けるは、かう申せばとて平家のかたふどするとはおぼしめされ候まじ。たとへさも候へ、いかでかわがてらのはぢをもおもひ、もんとのをばおしまでは候べき。むかしは源平さうにあらそひて、いづれせうれつなかりしかども、平家よをとつて廿よねん、なびかぬくさ木も候はず。内々のたちのありさまも、こせいにてたやすふおとしがたし。よくくはかりごとをめぐらし、せいをあつめてよせ給ふべふや候らんと、じこくをうつさんがために、ながくとぞせんぎしける。じうゑんぼうのあじやりけいしう、ふしなはめのはらまきをき、かしらつゝんで、せんぎのにはにすゝみいでゝ申けるは、しうこをほかにひくべからず。われらがほんぐはん、きよみはらのてんわう大どものわうじにをそれさせ給ひて、やまとの國よし野山をいでゝ、たうこくうだのこほりをすぎさせ給ひけるに、そのせいわづかに十七き、されどもいがいせにこえ、みのおはりのせいをもつて、つゐに大どものわうじをほろぼし、くらゐにつき給ひ

わか大しゆには―脱文  
あるか。

水をのぢやうれん―  
なし(覺一本)。

しもかはべ―なし  
(覺一本)。

けり。ぎうてうふところにいれば、じんりんこれをあはれむといふほんもんあり。よはしらず  
けいしうがもんとにをひては、こよひ六はらへをしよせてうちじにせよとぞ申ける。ゑんまん  
おんのたいふげんかくが申けるは、せんぎはしおほし。よのふくるにいそげやすめやとぞ申  
ける。によいがみねよりからめてにむかふらうそう共の大しやうぐんには、源三ゐにう道、じ  
やうゑんばうのあじやりけいしう、りつじやうばうのあじやりにちめん、そのほうめんぜん  
ち、くがでしに、ぎほう、ぜんゑいをさきとして、ひたかぶと六百よ人ぞむかひける。大て  
よりむかふわか大しゆには、ゑんまんめんのおにとさ、りつじやうばうのいがきみ、これ三  
人はうち物とてはおにゝもかみにもあふべきといふ、一人たうせんのものどもなり。びやう  
どうめんには、いなばのりつしやあら太夫、じやうきめんのあらとさ、すみの六郎ばう、し  
まのあじやり、つゝゐのほうしに、きやうのあじやり、あくせうなごん、きたのめんには、こ  
んくはうめんの六てんぐ、たゆふ、しきぶ、のと、かゞ、さど、びごとうなり。五ちめんたち  
ま、水のをのぢやうれん、まつ井のひご、大やのしゆんちやう、じうゑんばうのあじやりけい  
しうがぼうの人、六十人がうち、かゞのくはうじう、ぎやうぶしゆんしう、ほうしばらには、一  
らいほうしすぐれたる。だうしゆには、つゝゐのじやうめうみやうしう、をぐらのそんげつ、  
そんゑい、じけい、らくぢう、かなこぶしこんけんのげんゑいばう、ぶしにはいづの守なかつ  
な、源大夫はうぐはんかねつな、六でうのくらんど中いゑ、しそくらんど太郎中みつ、しも  
かはべのとう三郎きよちか、わたなべのはぶく、はりまの次郎さづく、さつまのひやうゑのじ

しはし―木明。

しうわう―昭王。

う、ちやう七となふ、つゝ源太、あたふむまの三郎、きおうたきぐち、きよ(し)、すゝみを  
さきとして、ひたかぶと一千よ人、三井寺をこそうちたちけれ。三井てらにはみやいらせ給ふ  
のちは、大ぜきこぜきほりきつて、さかもぎをひみたりければ、ほりにはしをわたし、さかも  
ぎをのけんとしけるほどに、しごくをしうつりて、せきぢのにはとりなきあへり。ゑんまん  
あんたゆうげんかくが申けるは、しはしむかししんのしうわうのとき、まうしやうくんがきみ  
のいましめをかうぶりて、めしこめられたりけるが、はかりごとをもつてにげのがれるとき  
に、かんこくはんにいたりぬ。にはとりのなかながぎりは此せきのとをひらく事なし。まう  
しやうくんが三千のかくの中に、てんかくといふつはものあり。にはとりのなくまねをありが  
たふしければ、にはとりなきつゞくとぞいひける。かれがたかきところののぼつて、とりのな  
くまねをしたりければ、せきぢのにはとりなきつたへてみななきぬ。とりのそらねにばかされ  
て、せきのとあけてとをしけり。これもてきのはかりごとにてもやあらむずらむ。たゞよせよ  
と申けれ共、さ月のみじか夜なれば、はやほのぐとぞあけにける。いづのかみの給ひけるは、  
たゞいまこゝにてとりなめては、六はらへははくちうにこそよせんずれ。夜うちこそさりと  
とおもひつれ、ひるいくさにはいかにもかなふまじとて、からめてはにやぬがみねよりよびか  
へす。大てはまつさかよりとつてかへす。わか大しゆどもが申けるは、これはしよせん一に  
よぼうがながせんぎにこそ夜はあけたれ。そのぼうきれやとて、をしよせてさんぐにうちや  
ぶる。ふせぎたゝかふでしどうしゆく、す十人うたれぬ。一によぼうははうゝ六はらへまい

り、此よしをいち／＼にうつたえ申されけれども、六はらへぐんぴやうはせあつまつて、さばぐ事もなかりけり。

はしがつせん

みやはさんもんなんとをもつてこそ、さりともおぼしめされつれども、三井でらばかりにてはいかにもかなふまじとて、同廿三日のあかつきになんとへおもむき給ひけり。みやはせみおれ、こゑだときこえしかんちくの御ふえ二ツもたせ給ひけり。せみおれはとばのみの御とき、こがねを干りやうそうちやうのみかどへたてまつらせ給ひたりければ、その御返ほうとおぼしくて、しやうしんのせみのごとくにふしつゐたる、かんちくのふゑたけひとよわたさせ給ふ。

ちうほう重寶  
がくそう覺宗

されゆき

実衡(覺一本)。

せて、だんの上にて七日かおして、ゑらせ給へる御ふえなり。おぼろげの御あそびにはとりもいだされざりけるを、あるときの御あそびに、たかまつの中なごんさねゆきのきやう、御ふゑをたまはつてふかれけるが、たゞよのつねのふえのやうにおもはれて、ひぎよりしたにをかれたりければ、ふえやとがめたりけん、そのときせみおれにけり。それしてぞせみおれとはつけられける。此みやのつたはらせ給ひたりしを、いま心ばそやおぼしめされけん、なくこんだうのみろくにたてまつらせ給ひけり。けうげの御あかつき、ちぐうの御ためかとおぼえてあはれなりし御事なり。じうゑんばうのあじやりけいしう、はとのつゑにすがり、みやの御まへに

よしみち―  
俊通（巻一本）。

まいりて申けるは、此身はすてによはひ八じゆんにたけて、ぎやうぶにかなひがたく候へば、いとま申てまかりとゞまりて候。でしにて候ぎやうぶきやうしゆんしうをまいらせ候。かのしゆんしうと申は、さがみの國のちう人、山のうちのすどうぎやうぶのじうよしみちがこなり。ちゝしゆどうぎやうぶは、へいちのかつせんのとき、こさまのかみよしとにもつゐて六でうかはらにてうちじにつかまつり候ぬ。いさゝかゆかり候によつて、ゆうせうよりあとふところにておゝしたてゝ、心のそこまでもしりて候。これをばいづくまでもめしぐせらるべふ候と、申もあへずなみだにむせびければ、いつのよしみにさればかくは申らんとて、みやも御なみだにむせびおはします。しかるべきらうそうどもをばとゞめさせ給へり。三ゐにう道の一のい、三井でらほうし、つがうそのせい一千よ人、だいごちにかゝつてなんとへおもむき給へり。さるほどにみやはうちとてらとのあひだにて、六どまで御らくばあり。これはさんぬる夜御しんもならざりつるゆへなりとて、うちのはし三げんひきはづし、びやうどうみんにいらせ給ふ。しばし御きうそくありけり。うちがはにむま共ひきつけゝひやし、くらぐそくをこしらへなんどしけるほどに、六はらにはこれをきゝて、みやははやなんとへおもむき給ふなりとて、平家の大ぜいをつかたてまつる。大しやうぐんには、にう道の三なん、さひやう衛のかみともゝり、中ぐうのすけみちもり、さつまのかみたゞのり、さぶらひ大しやうには、かづさのかみたゞきよ、太郎はうぐはんたゞつな、ひだのかみかげいゑ、ひだの太郎はうぐはんかげたか、ゑつ中のぜんしもりとし、むさしの三郎さゑもんありくに、いとう、さいとうのしかるべきもの

中ぐうのすけ―左馬頭  
行盛（巻一本）。

ども、われも／＼とすゝみけり。つがうそのせい、二まんよき、こはた山をうちこえて、うぬのはしつめにをしよす。てきびやうどうぬんにありと見てければ、はしよりこなたにて、二まんよき天もひゞき地もうごくほどにときをつくる事三かどなり。せんちんがはしをひめたぞ、あやまちすなといひけれど、ごちんはこれをきゝつけず、われさきにとかゝるほどに、せんちん二百よきをしおとされて水におぼれてながれけり。みやの御かたには、大やのしゆんちやう、わたなべのきおうがいはけるやぞ、ものにもつよくとをりける。はしのりやうはうのつめにうちたつて、やあはせしけり。五ちぬんのたちまは、なぎなたのさやをはづし、かぶとのしころをかたぶけて、はしはひめたり、てきにはよりあひがたし、しころをかたぶけてたちたるところに、平家これを見て、さしつめひきつめさんぐにいる。たちまは、こゆるやをばつみくゞり、さがるやをばおどりこゑ、むかふてくるやをばなぎなたにてきつておとす。てきもみかたもあれを見よとぞけんぶつす。それよりしてぞやぎりのたちまとは申ける。だうしゆにつゝ、ぬのじゆうめうみやうしうは、かちのひたゝれに、くろかはおどしのよろひきて、こくしつのたちをはき、大なかぐろのやをひ、ぬりごめどうのゆみのまつなかとつて、このむしらえのなぎなたととりそへて、はしのうへにぞすゝみける。大をんあけてなのりけるは、日ごろはをともきゝ、いまはめにも見よ、をんじやうじにはそのかくれなし。だうしゆにつゝ、ぬのじやうめうばうみやうしうとて、一人たうせんのつはものぞや。平家のかたにわれとおもはん人々はかけいで給へ、げんざんせんといふまゝに、廿五さしたるやをさしつめひきつめさんぐにい

けるに、十二人やにはいころし、十二人にてをふせて、一ツはのこりてゑびらにあり。ゆみをうしろへからとなげすて、ゑびらもとめてかはへなげ入。てきいかにと見るところに、つらぬきぬひではだしになり、なぎなたのさやをはづめて、はしのゆきけたを、さら／＼とはしりわたる。人はをそれてわたらねども、じやうめうばうが心には、いちでう二でうのおほちどこそふるまひけれ。なぎなたにてむかふてき五人なぎふせ、六人にあたるところにえうちおつてすてゝけり。そのゝちたちをぬひてきりけるが、三人きりふせ四人にあたるたびにあまりにかぶどのはちにつよふうちあて、めぬきのもとよりちやうどおれ、かはへざぶどいる。いまはたのむところなし。こしのかたなにてひとへにしなんとくるひけり。じうゑんばうのあじやりのめしつかひけるしもべのうちに、一らいほうしとて、しやうねん十七さいになるほうしあり。じやうめうにちからをつけんとして、つゞめてたゝかひけるが、はしのゆきけたはせばし、とをるべきやうはなし。じやうめうがかぶどのてさきにてををひて、あしふ候じやうめうばうとて、かたをゆらりとこえてぞたゝかひける。一らいほうしはやがてうちじにしてけり。じやうめうは、はふ／＼かへりて、びやうどうぬんのもんぜんなるしばのうへによりひぬぎをひて、やめをかずへければ、六十三ところ、うらくやめ五ところ、されどもいたでならねば、かしらをつゝみ、ゆみきりおつてつえにつめて、なんとのかたへぞおちゆきける。源三ゐにう道は、ちやうけんのひたゝれに、しながはおどしのよろひきて、いまをさいごとおもはれければ、わざとかぶとはきたまはず、ちやくしいづのかみ中つなは、あかぢのにしきのひたゝれに、くろいとお



どしのよろひきて、ゆみをつよくひかんとて、これもかぶとはきざりけり。はしのゆきけたをじやうめうがわたるをてほんにして、三ゐてらのあくそう、わたなべのつわもの共、はしりわたりくたゝかひけり。ひつくんでかはへ入もあり、うちじにするものもあり、はしの上のいくさ、ひのいづるほどこそ見えにけれ。

よりまささいこ

せんちんはかづさのかみたゞきよ、大しやうに申されけるは、はしのうへのいくさひのいづるほどになりて候。かなふべしとおぼえ候はず。いまはかはをわたすべきにて候が、おりふしみだれのころにて、水かさはるかにまさりて候。わたすほどにては、むま人をしながされうせんず。よどいもあらひへやむかひ候べき。かはち地をやまはり候べきと申せば、しもづけの國のちう人、あしかゞの又太郎すゝみいで、申けるは、をふそれある申にて候へども、あしも申させ給ふかづさどのかな。めにかくるてきをたゞいまうちたてまつらで、なんとへいらさぶらひなば、よし野とづがはとかやのものどもまいりて、たゞいまも大ぜいにならせ給はんず。それはなを御大事にて候べし。いくさのびてよき事やは候はぬものを。よどいもあらひかはちゞをば天ちくしんだんのぶしがまいりてむかふべきか。それもわれくどもこそむかはんずらめ。むさしとしもづけとのさかひに、ぼんどう太郎ときこえしとねがはといふ大があり。こがすぎ、ながみのわたりとて、ともに大事のわたりなり。ちゝぶとあしかゞと申をたがひて、

をのじ小野寺  
(寛一本)  
 ひやうこの一へやこ  
 の四郎(寛一本)  
 以下寛一本と差がある。

つねにかつせんをつかまつり候。かうづけの國のちう人につたのにう道かたらはれて、からめてにむかひ候。ちゝぶがかたよりみなふねをわられて、につたにう道人にたのまれながら、ふねがなければとて、たゞいまこゝをわたさずは、われらがなききずなるべし。水におぼれてしなばしね、いざわたらんとて、むまいかだをつくりて、すぎのわたりをもわたせばこそわたしけめ。ばんどうむしやのならひとして、かはをへだてつるてきをせむるに、ふちせをきらふやうある。此かはふかさあさゝもとねがはいかほどのをとりまさりはよもあらじ。いざわたさんとて、たづなはいくり、まつさきにこそうち入れ。同くつばみをならぶるつはものども、をのじのせんじ太郎、ひやうこの七郎太郎、さぬきの四郎、太郎ひろつな、をむろ、ふかす、山がみ、なばの太郎、らうどうに、たんの二郎、ねの六郎、大おかのおん五郎、きりふの六郎、こふかの二郎、たなかのそう太をさきとして、三百よきぞうち入たる。あしかゞ大をんじやうをあげて下ちしけるは、つよきむまをばうはてにたてよ。よはきむまをばしたてになせ。むまのあしのをよばんぼどは、たづなをくれてあゆませよ。はづまばたづなかくつておよがせよ。さがらんものをばゆはずにとりつかせよ。かたをならべてわたすべし。むまのかしらしづまばひきあげよ。いとふひあてひきかづくな。むまにはよはく、水にはつよくあたるべし。てきいるともあひびきすな。つねにしころをかたぶけよ。あまりにかたぶけてへんいさすな。かねにわたしてあやまちすな。水にしなひてわたせやわたせと下ちをして、三百よきを一きもながさず、むかひのきしにさつとわたす。あしかゞはかちのひたゝれにあかがはのよろひき

かちの―杓葉の綾の  
(寛一本)

て、しらつきげなるむまに、きんぶくりんのくらをひてのつたりけり。あぶみふんばりついたちあがつて、よろひの水うちばらひ、まづなのりけるは、てうてきまさかどをほろぼして、くはんしやうにあづかるたはらとうだひでさとが十だい、あしかゞの太郎としつながちやくなん、又太郎、しやうねん十八さい、かやうにむくはんむなるものゝ、みやにむかひたてまつりてゆみをひく事は、みやうがのほどそのをそれすくならず候へども、ゆみもやもみやうがのほども、こん日みな平家大じやうにう道どのゝ御身のうへにこそ候はんずれ。みやのみかたにわれとおもはん人々はかけいで給へや、げんさんせんといひ、びやうどうあんのものまへにをしよせおめひてたゝかひけり。これを見て二まんよきうち入てわたす。むま人にせかれて、さすがにはやきうちがはの水はうへへぞたゝへたる。をのづからはづるゝみづは、いづれもたまらずながれけり。いかゞしたりけん、いがいせりやうこくのぐんびやう六百よき、馬いかだををしきられ、水におぼれてながれけり。もえぎひおどし、いろ／＼のよろひのうきぬしづみぬながれければ、かみなみ山のもみちばの、みねのあらしにさそはれて、たつたがはの秋のくれ、みぜきにかゝつてながれもやらぬにことならず。いかゞしたりけん、ひおどしのよろひきたるむしやが三人、うちのおじろにかゝつてゆられけるを、いかなる人やよみたりけん、

いせむしやはみなひおどしのよろひきてうちのおじろにかゝりぬるかな

これはいせの國のちう人に、くらだのごへい四郎、ひのゝ十郎、とばの源六といふものなり。くらだがゆみはずを、いはのはざまにねちたてかきあがりつゝ、二人をもひきあげてたすけた

とばの源六乙部彌七  
(寛一本)。

三郎丸―次郎丸  
(覺一本)

りけるとかや。そのうち大ぜいかはをわたして、びやうどうぬんのものうちへせめいり／＼たゝかひけり。みやをなんとへさきだてまいらせて、三ぬにう道いげのこりとゞまつてふせぎやいけり。三ぬにう道八十になりていくさして、みぎのひざぐちいさせて、いまはかなはじとやおもはれけん、じかいせんとて、びやうどうぬんのものうちへひきしりぞく。てきをつかくれば、じなん源太夫はうぐはんかねつな、こんちのにしきのひたゝれに、ひおどしのよろひきて、しろあしげなるむまに、いかけちのくらをひてのりたりけるが、中にへだゝり、かへしあはせ／＼たゝかひけり。かづさのかみ七百よきにてとりこめてたゝかひけるに、源太夫はうぐはん十七きにておめいてたゝかふ。かづさのかみがはなつやにうちかぶとをいさせて、ひるむところに、かづさの守がわらは、三郎丸といふもの、をしならべてむずとくみておつ。はうぐはんでをひたれ共、三郎丸をとつてをさゑ、くびをかききつて、たちあがらんとするところに、へいじのつはものども、われも／＼とおちかさなつて、はうぐはんをつぬにそこにてうちてけり。三ぬにう道はつりどのにてちやう七となふをめして、わがくびとれとの給へば、となふなみだをながし、御くびたゞいま給るべしとおぼえず候。御じがひだにめされ候はゞと申ければ、にう道げにもとて、よろひぬぎをき、かうじやうにねんぶつし給ひて、さいごの事こそあはれなれ。

むもれ木の花さく事もなかりしにみのなるはてぞかなしかりける

と、これをさいごのことばにて、たちのきつさきをはらにつきたてたふれかゝり、つらぬかれ

てぞうせ給ふ。このときうたよむべふはなかつしかども、わかきよりあながちにもてあつかひたるみちなれば、さいごまでもわすれ給はざりけりとあはれなり。くびをばとなふなく／＼かきおとし、ひたゝれのそでにつゝみ、てきちんをのがれつゝ、人にも見せじとおもひければ、いしにくゝりあはせて、うちがはのふかきところにしづめてけり。いづのかみなかつなは、さんぐにたゝかひいたでをふて、いまはかうとやおもはれけん、じがいてこそふしにけれ。そのくびをばしもかはべのとう三郎きよちかゞとつて、ほんだうの大ゆかのしたになげいれけり。三なん六でうのくらんど申いゑ、そのくらんど太郎中みつも、一しよにてはらかききつてぞふしにける。此六でうくらんど、申は、六でうのはんぐはんためよしがじなん、たちはきせんじやうよしかたがこなり。ちゝよしかたは、きうじゆ二年むさしの國大くらにてかまくらのあく源太よしひらがためにうたれぬ。そのゝちみなしごにてありしを、源三めにう道こにして、くらんどになしたりしほどに、日ごろのちぎりをへんぜず、いまはかやうにうちじにしけるとぞ。ゆみやとりのならひとはいひながら、あはれなりし事共なり。きおうたきぐちをば、平家のつはもの共いかにもしていけどりにせんとて、めん／＼に心をかけたりけれ共、きおうも心ゑて、さんぐにたゝかひしがいてこそうせにけれ。ゑんまんゐんのたゆふはやたねのあるほどいて、いまはみややはるかにのびさせ給ひぬらんとおもひければ、大たちはき、なきなたもちてきのちんをうちやぶり、うちがはへとびいり、ものゝぐ一ツもすてずして、むかひのきしにおよぎつく。たかきところののぼりて、平家の人々、これまでは御大事かなとよば

はつて、なぎなたにて、むかひのかたをまねきつゝ、三井でらにむかつてぞかへりける。

たかくらの宮さいご

しんらがいけにゐの  
の池(寛一本)。

ひだのかみかげいゑはふるきつはものにて、みやをばなんとへさきだてまいらせたるらんと、いくさをばせて、五百よきにてなんとをさしてをひたてまつる。あのごとくみやは甘よきにておちさせ給ふに、くはうみやうせんのとりめのまへにて、みやにをつつきたてまつり、あめのふるやうにいたてまつる。いづれがやとはしらねども、みやの御そばゝらにや一ツいたてまいらする。御むまにもたまらせ給はず、おちさせ給ふを、つはもの共おちあひまいらせて、やがて御くびをぞ給りける。おにとさあらとさ太夫なんどゝいふものども、そこにてみなうちじにしてんげり。御ともつかまつるほどのあくそうのそにて一人ももるゝはなかりけり。みやの御めのとこに、六でうのすけ太夫むねはるは、ならびなきおくびやうものなりけるが、むまはよはし、てきはつゞく、せんかたなさにむまよりとびおり、しんらがいけにとび入て、めばかりわづかにさしいだして、ふるひゐたれば、しばらくありて、てきみなくびどもとつてかへる。その中にじやうへきたる人のくびもなきをしとみにのせてかひてとをるを、たれやらんとおもひて、おそろしながらのぞひて見れば、わがしうのみやにてぞましゝける。われしなば御くはんにいれよとおぼせられしこえだときこえしふえも、いまだ御こしにぞさゝれたる。はしりいでゝとりつきまいらせばやとおもへ共、おそろしければかなはず、たゞ水のそこにて

ぞなきあたる。てきみなすぎてのち、いけよりあがつて、ぬれたる物共しぼりきて、なく／＼京へむかひてぞのぼりける。なんとの大しゆせんちんはこづがはにすゝみ、ごちんはいまだこうぶくじのみなみの大もんにぞゆらへたる。らうせう七千よき御むかへにまいりけるが、みやはやくはうみやうせんのとりめのまへにてうたれ給ひぬときこえしかば、大しゆどもなみだをながしてひきかへす。いま五十ちやうばかりをまちつけさせ給はで、うたれさせ給へるみやの御うんのほどこそうたてけれ。平家は宮ならびに三みにう道の一のい、三井でらほうし、つがうそのせい五百よ人がくびをとつて、ゆふべにをよんで京へ入。つはものどものゝしりさはぐ事おびたゞし。三みにう道のくびをば、ちやう七となふがいにくゝりあはせて、うちがはのふかき所にしづめければ人見ざりけり。こどものくびはみなたづねいだされけり。みやの御くびは、みやの御かたへつねにまいりかよふ人もなければ、見しりまいらせたるものもなし。てんやくのかみが一とせ御れうちのためにめされたりしかば、それぞ見しりまいらせんとてめされけれ共、しやううとてまいらず。みやのとしごろめされける女ばう一人めしいだされて、たづねられければ、御こそうみまいらせける女ばうなれば、なじかは見そんじたてまつるべき。御くびを見まいらせて、やがてなみだにむせびけるにこそ、宮の御くびにはさだまりけれ。みやの御ひたいにきずのわたらせ給ひけり。これは一とせあしきかさのいできさせ給ひたりしを、てんやくのかみめでたふれうちしまいらせて、そのときはのがれさせおはせしが、いまはあへなくうせさせ給ふぞあさましき。みやははら／＼に御こあまたわたらせ給ふ。八でうの

女ゐんにいよのかみもろのりがむすめ、三ゐのつぼねとて候ける女ばうのはらにも、わかぎみわたらせ給ひけり。此みやたちをば女ゐんわがのごとくにおぼしめされて、御ふところにてそだてまいらせ給ひけり。たかくらのみやの御むほんおこさせ給ひて、うせ給ふときこえしかば、女ゐんたとひいかなる御大事にをよぶとも、此みやたちをばいだしたてまつるべしともおぼえずとて、おしみまいらせ給ひけり。六はらより大じやうにう道、いけの中な言よりもりをもつて、此御しよにたかくらのみやのわか君ひめきみわたらせ給ふなる。ひめ君をば申にをよばず。わか君をばいだしまいらせ給へと申せば、女ゐんの御めのとのさいしやうと申女ばうに中なごんあひぐしてつねにまいられければ、日ごろはなつかしふこそおぼしめされしに、いまかく申てまいられたれば、あらぬ人のやうにうとましくこそおぼしめせ。女ゐん御へんじには、さればこそかゝるきこえありしかかつき、御めのとなんど心おさなふもぐしたてまつりて、いでにけるやらん、此御しよにはわたらせ給はずと御返事ありければ、中なごん、さてはちからにをよばずとて、まし／＼けるに、大じやうにう道かさねての給ひけるは、なんでうその御しよならではいづくにわたらせ給ふべき。そのぎならば御しよ中をさがしたてまつれとて、つかひしきなみにありければ、中なごんは、すではしたなき事がらになり、もんにつはものををきなんどして、御しよ中をさがしたてまつるべしときこえしかば、こはいかゞすべきとて、御しよ中の女ばうたちあきれさはがしく見えたり。わか君しやうねん七さいにならせ給ひけるが、これをきこしめし、女ゐんの御まへにまいりて申させ給ひけるは、いまはこれほど



の御大事に候へば、ちからにをよばず候。たゞとく／＼いださせ給へと申させ給へば、ねうめん、人の七ツなどはいまだに事もおもはぬほどぞかし。われゆへ大事いできたらん事をかたはらいたさにかくの給ふいとおしさよ。よしなかりける人を、此六七年でなれし事よとて、ぎよゑのそでをぞしぼらせまします。御は、三めのつぼねは申にをよばず、によくはんども、つぼね／＼のそんなわらべにいたるまでも、なみだをながしそでをしぼらぬはなし。御は、三めのつぼね、なく／＼御ゑをめさせたまつりいだしまいらせ給ふも、たゞさいごの御いでたちとぞおぼしめされける。中なごんもおなじくたもとをしぼりつゝ、御くるまのしりわにまいり、六はらへわたしたてまつる。さきのう大しやうむねもり、此みやを一め見たてまつり、ちゝのにう道に申されけるは、さきのよにいかなるちぎりかさぶらひけん、一め見たてまつりしより、あまりに御いとおしふおもひたまつり候。此みやの御いのちにはむねもりかはり候はんと申されければ、にう道、物もしらぬむね盛かなど、しばしはきゝもいれ給はざりけるが、かさねてさいさん申されければ、さらばとく／＼しゆつけさせたまつりて、をむろへいれたてまつれとぞの給ひける。う大しやう大きによろこびて、女めんへ此よし申されければ、女めん御てをあはせてよろこばせまします。御は、三めのつぼねの御心の中いかばかりうれしとおぼしめしけん、やがて御しゆつけありて、しやくしにさだまらせ給ふ。やすぬのみやだうそんと申せしは、此みやの御事なり。又ならにも一しよまし／＼けり。御めのとさぬきのしげひ(かみ)でがしゆつけさせたまつり、ほくろくだうゑつ中の國へおちくだりたりしを、きそしうに

野いり―野依  
(寛一本)。

とうじう―通衆。

けんてう―兼明。

したてまつらんとて、ゑつ中のくに、御しよつくりてもてなしたてまつりけるが、木そしやうらくのとき、おなじく此みやも御のぼりありて、げんぞくありしかば、げんぞくのみやとも申けり。又木そのみやとも申、のちにはさがの野いりにわたらせ給ひしかば、のいりのみやとぞ申ける。むかしとうじうといふさうにんあり。うちどの、二でうどのをばともにくはんばくのさうまします、御とし八十と申たりしもたがはず。そつのない大じんをば、るさいのさうましますと申たりしもたがはず。しやうとく大し、そうしゆん天わうをわうしのさうましますと申させ給ひたりしも、むまこの大じんにころされ給ひにき。かならずさう人ともなければ、しかるべき人々はかうこそめでたくおはしますに、そもくさうせうなごんはめでたきさう人こそ申せしに、此みやを見そんじまいらせて、うしなひたてまつるこそあさましかれ。けんてうしんわう、ぐへいしんわう、さきの中しよ、のちの中しよのわうとて、けんわうのせいしゆわうじにてわたらせ給ひしかども、つゐに御くらゐにもつかせ給はざれども、いつかは御むほんおこさせ給ひし。又ご三でうあんのだい三のわうじ、すけひとのしんわうをば、とうぐうの御くらゐののちはかならず此みやをばたいしにたてまいらせ給へとおほせをかせられたりしに、とうぐう御かくれありしかども、しらかはのあゐいかとおほしめしけん、つゐにたいしにもたてまいらせ給はず。あまつさへ此しんわうの御こを御まへにて源氏のしやうをさづけたてまつりて、むゐより一どに三ゐにじよして、やがて中じやうになしたてまつり給ひけり。これはなぞの、さ大じんどの、御事なり。一とせ源氏むゐより三ゐになる事は、さがの天わうの御こ、やうぜ

一とせ―一世の  
(寛一本)。

さださと一定卿  
(寛一本)

これひと以仁。

いみんの大なごんさださとのほかはうけたまはりをやばず。又たかくらのみやうちたてまつらんとて、ちうふくのほうしゆせられけるかうそうたちくはんしやうおこなはる。さきのう大しやうむねもりのしそく、しづうきよむね、三ゐして、三ゐのじづうとぞ申ける。ことし十二さい、ちゝのきやうも此よはひにてはわづかにひやう衛のすけにてこそおはせしに、おそろしゝとぞ人申ける。これはみなもとのこれひとならびによりまさほうしついたうのしやうとぞ、きゝがきにはありける。みなもとのこれひととは、たかくらのみやを申けり。まさしく大上ほうわうの御こをうちたてまつるのみならず、ぼんにんにさへなしたてまつるぞあさましき。

ぬえ

そもゝよりまさと申は、つのかみよりみつが五だいのこういん、みかはのかみよりつながまご、ひやうごのかみ中まさがこなり。ほうげんにみかたにてまつさきかけたりしか共、させるしやうにもあづからず。平治に又しんるいをすてまいりたりしか共、おんしやうこれおろかなり。ちうだいのしよくなれば、大うちやしゆごうけ給りてとしひさしかりしかども、しうでんをばゆるされざりけり。としたけよはひかたぶひてのち、じゆつくはひのわか一しゆつかまつりてこそ、しうでんをばゆるされたりけれ。

人しれず大うち山の山もりはこがくれてのみ月を見るかな

とつかまつり、しうでんしたりけるとぞきこえし。四みにてしばらく候けるが、つねに三みに心をかけつゝ、

のぼるべきたよりなき身は木のもとにしみをひろひてよをわたるかな

とつかまつりて、三ゐしたりけるとぞきこえし。すなはちしゆつけし給ひて、ことしは七十七にぞなられる。此よりまさ一ごのかうみやうとおぼえしは、この衛のぬんのとき、よなくおびえさせ給ふ事あり。大ぼうひほうをしゆせられけれども、しるしなし。人申けるは、とう三でうのもりよりくろくも一むらたちきたり、御てんにをほへば、そのときかならずおびえさせ給ふと申。こはいかにすべきとて、くぎやうせんぎあり。しよせん源平のつはものゝうちにしかるべきものをめして、けいごさせらるべしとさだめらる。くはんちのころ、ほりかはの天わうかくのごとおびえさせ給ふ事ありけるに、そのときのしやうぐん、さきのむつのかみみなもとのよいいへをめさる。かういろのかりぎぬにぬりごめどうのゆみもちて、山鳥のおにてはぎたるとがりや二すちとりそへて、なんでんの大ゆかにしこうす。御なうのときにのぞんで、つるかけする事三ど、そのゝち御ぜんのかたをにらまえて、さきのむつのかみみなもとのよいいゑとかうじやうになのりければ、きく人みな身のけもよだつて、御なうもおこたらせ給ひけり。しかればすなはちせんれいにまかせ、けいごあるべしとて、よりまさをゑらび申さる。そのころひやうごのかみと申けるが、めされてまいられけり。わがみぶゆうのいゑにむまれて、なみにぬけめさるゝ事は、いゑのめんぼくなれども、てうかにぶしををかるゝ事、ぎや

くほんのものをしりぞけ、いちよくのものをほろぼさんがためなり。されどもめに見えぬへんげのものをつかまつれとのちよくちやうこそ、しかるべしとおぼえねとつぶやひてぞいでにける。頼まさはあさぎのかりぎぬにしげどうのゆみもちて、これも山どりのおにてはぎたるとがりや二すちとりそへて、たのみきりたるらうどう、とをたふみの國のちう人、井のさうたといふものに、くろほろのやをはせ、一人ぞぐしたりける。夜ふけ人しづまつて、さまぐにせけんをうかゞひ見るほどに、日ごろ人のいふにたがはずとう三でうのもりのかたより、れいの一むらくもいできたりて、御てんのうへに五ちやうばかりぞたなびきたる。くものうちにあやしきものゝすがたあり。よりまさこれをいそんずるものならば、よにあるべき身共おぼえず、なむきみやうちやうらい八まん大ぼさつと心のそこにきねんして、かぶらやをとつてつがひ、しばしかためてひやうどいる。てごたへしてふつとたつ。やがてやたちながら、みなみのこにはにどうどおつ。さうたつとより、とつてをさへ、五かたなこそさしたりけれ。そのとき上の人々、てゝにひをいだし、これを御らんじけるに、かしらはさる、むくろはたぬき、おはくちなは、あしてはとらのすがたなり。なくこゑはぬえにぞにたりける。五かいちよといふものなり。しゆじやう御かんのあまりに、しゝわうといふ御けんをよりまさにくだし給る。よりながのさふこれを給り、つゐでよりまさに給るとて、ころはう月のはじめの事なりければ、くもぬにほととぎす二こゑ三こゑをとづれてすぎけるに、よりながのさふ、

ほととぎすくもぬになをやあぐるらん

とおほせかけられたりければ、よりまさみぎのひざをつき、ひだりのそでをひろげて、月をそばめにうけ、ゆみわきばさみて、

ゆみはり月のいるにまかせて

とつかまつりて、御けんを給はつてぞいでにける。ゆみやのみにちやうぜるのみならず、かだうもすぐれたりけると、きみもしんもかんぜらる。さて此へんげのものをば、うつをぶねに入てながされけるとぞきこえし。よりまさはいづの國を給はつて、しそくなかつなじゆりやし、わがみはたんばの五かのしやう、わかさのこふみやがはちぎやうして、さてあるべき人の、よしなき事をおもひくはだち、わがみもしんもほろびぬることあさましけれ。よりまさはゆゝしふこそ申たれども、をんごくはしらず、きんごくのげんじだにもはせまいらず、さんもんさへかたらひあはれざりしうへは、とかう申にをよばず。又さんぬるおうほうのころ、二でうのめん御ざいみのときに、ぬえといふけてうきん中になゐて、しば／＼しんきんをなやます事ありき。せんれいをまかせよりまさをめされけり。ころは五月廿日あまりのまだよひの事なるに、ぬえたゞ一こゑをとづれて、ふたこゑともなかず。めざせどもしらぬやみではあり、すがたかたちも見えざれば、やつばをいづくにともさだめがたし。よりまさはかりごとに、まづ大かぶらをとつてつがひ、ぬえのこゑしつるところ、だいのうへにぞいあげたる。かぶらのをとおどろひて、こくうにしばしはひめいたり。二のやをこかぶらとつてつがひ、ふつといきつて、ぬえとかぶらとならべてまへにぞおとしたる。きん中さゝめひて、御かんゝめな

らず、御ゑをかげさせ給ひけるに、そのときは、おほいのみかどのう大じんきんよしこう、これを給り、つゐでよりまさにかづけさせ給ふとて、むかしのやうゆうはくものほかのかりをいにき。いまのよりまさはあめの中にぬえをいたりとぞかんぜられる。

さ月やみなをあらはせるこよひかな

とおほせられたりければ、よりまさ、

たそがれ時もすぎぬとおもふに

とつかまつり、御ゑをかたにかけてたいしゆつす。その、ちいづの國を給り、しそく中つなじゆりやうになし、わが身三あしき。

日ごろはさんもんの大しゆこそ、みだれがはしき事ども申せしに、こんどはおんびんをぞんじてをとませず。なんとみゐではことをみだし、あるひはみやをふちしたてまつり、あるひは御むかへにまいる。これもつばらてうてきなりとて、ならをも三井でらをもせめらるべしとぞきこえける。まづてらをせめらるべしとて、同廿六日くらんどのかみしげひら、中ぐうのみちもり、そのせい三千よき、をんじやうじへはつかうす。てらもおもひきりしかば、さかもぎひきたゝかひけり。大しゆいげほうしばら三百人ぞほろびける。そのくはんぐんじちうにせめ入てひをかけければ、やくるところは、ほんがくゐん、じやうきいん、しんによいん、くはゑんいん、大ほういん、しやうりういん、けいそくゐん、ふけんだう、八けん四めんの大かうだう、きうたいくはしやうのほんばうならびにほんぞんどう、ごほうぜんしんのしやだん、二か

その一その夜。

たのしみ—樂。

きうだい—教待。

ぎう—御宇。

ぶつぜん—花  
(覺一本)。  
めいし—明師。

いろうもん、きやうぎう、くはんちやうだう、すべてだうしやたうべう六百三十七う、大津のざいけ千五百よ、地やきはらふ。わづかにこんだうばかりぞのこりける。大しのわたし給へる一さいきやう七千よくはん、ぶつぎう二千よたいもくはいじんとなるこそかなしけれ。ほうもんしやうけうのやけけふりは、大ぼん天わうのまなこもたちまちにくれ、しよ天みめうのたのしみもながくほろび、れうじん三ねつのくるしみもほのほにむせんでいよ／＼まさるらんとぞおぼえたる。それ三みでらは、あふみのぎ大りやうがわたくしのてらたりしを、天ち天わうによせたてまつりて、御ぐはんしよとなす。もとのほとけもかのみかどの御ほんぞん、しかるをしやうじんのみろくときこえ給ひしきうだいくはしやう、百六十ねんおこなひて、大しにふぞくし給ひき。とりた天わうまにほうでんよりあまくだつて、はるかにれうげげしやうのあかつきをまたせ給ふときこえつるに、こはいかにしつる事ぞや。天ち天むちとうこれ三だいのくはうていのぎう、うぶゆの水をめされたりしによつてこそ、三みでらとはなづけけれ。かゝるしやうせきなれども、いまはなにならず、けんみつしゆゆにほろびて、がらんさらにあとなし。三みつのだうちやうもなければ、れいのこゑもきこえず、一げのぶつぜんもなければ、あかのをともせざりけり。しゆくらうせきとくのめいしはおこなひにおこたり、じゆほうさうじうのでは又きやうけうわかれたり。てらのちやうり八でうのみや、天わうじのべつたうをとゞめられさせ給ふ。そうがう十よ人げくはんせらる。あくそうにはつゝみのじやうめうばうみやうせうにいたるまで三十よ人ぞながされける。



平家巻第五

第四十一句 みやこうつし……………三五一

ほうわうろうの御しよにまします事

らくしよ

みやこうつしのせんじう三十よど

へいあんじやうのさた

第四十二句 月見……………三五七

しんどのことはじめ

この衛かはらのさた

まつよひのこじやうのさた

ものかはのくらんど

第四十三句 もつけのまき……………三六〇

ひきめいさせらるゝ事

どくろのおほき事

むまのおにねずみのすくふ事

平家物語百二十句本

源中なごんまさよりのものとあをさぶらひ  
があくむ

第四十四句 よりともむほん……………三六三

大ばの三郎かげちかはやむま

きいの國なくさのこほりたかをのむらくも  
の事

てうてきそろひ廿よ人の事

五あさぎ

第四十五句 かんやうきう……………三六六

ゑんたんきこく

かめうかびきたつてゑんたんわたす事

でんくはうせんじやうじがい

くはやうぶにんのこと

第四十六句 もんがく……………三七一

あらぎやう

くはんじんちやう

三四九

るざい

めんぜん申

みやこかへりの事

平家あふみの國へはつこう

## 第四十七句 平家とうごくげかう……………三八二

これもり大しやうぐんになる事

たゞのりふくしやうぐんとなる事

みやばらの女ばうのさた

大しやうぐんみつのぞんちのさた

## 第五十句 ならゑんしやう……………三九六

なんとの大しゆただ成ちかまさのりやうし  
あくこう同平しやうこくのかうべぎちやうのたまど  
かうする事

同せのをのせいうちどらるゝ事

しげひらなんととはつかう

## 第四十八句 ふじがは……………三八六

げんじうきじまがはらせいぞろひ廿まんぎ

平家とりのはをとにおどろく事

しゆめのはんぐはんたゞきよをかたんの事

まさかどついはつのときのくはんしやうの事

## 第四十九句 五せつのさた……………三九四

ふくはらの京にしゆじやう御せんがう

しんてい大じやうゑの事

## 平家卷第五

### みやこうつし

ちしう四年六月三日ふくはらへぎやうがうあるべしとぞひしめきあへり。此日ごろみやこうつしあるべしとはないくさたありしかとも、こんみやうのほどはおもはざりつる物を、こはいかにとて上下さはぎあへり。三日にさだめられしが、あまつさへいま一日ひきあげて二日に成にけり。二日のうのこくに、ぎやうがうのみこしをよせたりければ、しゅじやうはこんねん三ざい、いまだおさなふまゝければ、なに心なふめされけり。しゅじやうのいとけなき御ときは、はゝきさきこそおなじこしにはめさるゝに、こんどはそのぎなし。御めのと平大なごんときたゞのきやうのきたのかた、そつのすけどのぞ、ひとつ御こしにはまいられる。中ぐう、みん、じやうくはうも御かうなる。せつしやうどのをはじめてまつり、大じやう大じんい下、くぎやうてん上人、われもくどぐぶせらる。三日ふくはらへつかせ給ふ。いけの大なごんよりもりのきやうのしゆくしよ、くはうきよになる。よりもりのいゑのしやうとて、正二ゐになり給ふ。九でうどのゝ御こ、う大しやうよしみちのきやうにこえられ給ひけり。せうろくのしんのきんだち、ぼんにんのじなんにかゝいこゑられ給ふ事、これはじめとぞきこえし。さるほどにほうわうをばにう道しやうこくやうくおもひなをりて、とば殿をいだしたてまつり、八でうからす丸のみふくもんみんの御しよへ御かうなしたてまつりしか共、又たかくらの

宮の御むほんによりて、大きにいきどをり、ふくはらへ御かうなしたてまつり、四めんにはたいたして、くち一ツあけたるところに、三げんのいたやをつくりて、をしこめたてまつる。しゆこのふしには、はらだの大夫たねなをばかりぞ候ひける。たやすく人のまいりかよふ事もなければ、わらはべこれをちうの御しよとぞ申ける。きくもいましくあさましかりし事共なり。いまはばんきのまつりごとをきこしめさばやとは、露ほどもおぼしめしよらず、あはれやまゝてらゝしゆぎやうして、御心のまゝになくさまばやとぞおぼせられる。平家のあぐぎやうにをひてはきはまりぬ。さんぬる安元よりこのかた、おほくのけいしやううんかく、あるひはながし、あるひはうしなひ、くはんばくをながしたてまつり、わがむこをくはんばくになし、ほうわうをせいなんのりきうにうつしたてまつり、だい二のわうじたかくらのみやをちうしたてまつり、いまのころとこころ、みやこうつしなれば、かやうにし給ふにやとぞ人申ける。あはれきうとはめでたくありつるみやこぞかし。わうじやうしゆごのちんじゆは、四はうにひかりをやはらげ、れいけんしゆしうのてらゝは、上下にいらかをならべ給ふ。はくせいばんみんなわづらひなく、五き七だうもたよりあり。されどもいまはつじゝをほりきつては、さかもぎをひきたりければ、くるまなんどのたやすふゆきかよふ事もなし。まれにゆく人も、をぐるまにのり、みちをへてこそとをりけれ。のきをあらそひし人のすまぬ目をへつゝあれぞゆく。いゑゝはかまがはかつらがはにこぼちいれ、いかだにくみうかべ、しざいざうぐはふねにつみ、ふくはらへとはこびくです。たゞなりに花のみやこ、いなかとなるこそかなし

けれ。いかなるものゝしわざにやありけん。きうとのだいのはしらに二しゆのうたをぞかきたりける。

もゝとせを四かへりまでにすぎにしをおたぎのさとのあれやはてなん

さきいづるはなのみやこをふりすてゝ風ふくはらのすゑぞあやうき

みやこうつりはこれせんじうなきにはあらず。神む天わうと申は、おじん五だいのみかど、ひこなぎさたけうのはふきあはせずのみことの第四のわうじ、御はゝはたまよりひめ、かい神のひめなり。天神七だい地神五だい、かみのよ十二だいのあとをうけ、にんわう百だいのていそなり。かのとのとりのとし、ひうがの國みやぎきのぐんにして、くはうわうのほうそをつめで、五十九ねんといひしつちのとのひつじのとし十月とうせいして、とよあしはらのなかつ國にとゞまり、此ころはやまとゝなづけたり。うねみの山をたひらげて、ていとをたてゝ、かしはらのちをきりはらひて、みやづくりし給ふ。これをかしはらのみやとは申なり。しかつしよりこのかた、だいゝのていわう、みやこをたこくたしよへうつさるゝ事三十どにあまり、四十どにをよべり。じんむ天わうよりけいかう天わうまで十二だいは、やまとの國こほりゝにみやこをたてゝ、たこくへはつめにうつされず。しかるをせいむ天わうぐはんねんに、やまとよりあふみの國にうつし、しがのこほりにみやこをたつ。ちうあい天わう二年に、あふみの國よりながどのくにゝうつして、とよらのこほりにみやこをたつ。かのみやこにてみかどかくれさせ給ひしかば、きさきじんぐうくはうぐうみよをうけとらせ給ふ。によていとして、しんら、は

せんじう—先蹤。

くさい、かうらい、けいたんまでもせめしたがへさせ給ひけり。いこくのいくさをしづめさせ給ひてのち、ちくぜんの國みかさこほりにして、御たんじやう、ところをうみのみやとぞ申ける。かけまくもかたじけなくも八まん大ぼさつの御事なり。くらゐにつき給ひては、おうじん天わうこれなり。そのゝちじんぐうくはうぐうは、やまとの國にかへりて、いはよわかざくら(れ)のみやにすませ給ふ。おうじん天わうおなじき國かるしまあけのみやにすみ給ふ。にとく天わうぐはんねんにつのくになにはのうらにうつりて、たかつのみやにすませ給ふ。りちう天わう二年にやまとの國にうつりて、とうちのこほりにみやこをたて、はんせい天わう元年に、かはちの國にうつりて、しばがきのみやにすませ給ふ。いんぎやう天わう四十二年に、なをやまとの國にうつりて、とをつあすかのみやにすませ給ふ。ゆうりやく天わう廿一年におなじくはつせあさくらにみやこをたつ。けいたい天わう五年に、山しろの國つゞきにうつりて、十二年、そのゝちをとひこにすみ給ふ。(くに)せんくは天わう元年、又やまとの國にかへつて、ひのくまやいるのみやにみやみし給ふ。それよりきんめい、びんだつ、しゆしゆん、すいこ、じよめい、くはうぎよく天わうまで、やまとにすみ給ふ。かうとく天わう大くは元年、津の國ながらにうつりて、とよざきのみやにまします。さいめい天わう二年になをやまとの國にかへつて、おかもとのみやにすませ給ふ。天ち天わう六年にあふみの國にうつりて、大津のみやをつくり給ふ。天む天わう元年に、なをやまとにかへつて、おかもとみなみのみやにすませ給ふ。これをきよみはらのみかど、申き。ちとうもんむ、二だいのせいてうは、おなじき國ふちはらの宮にすませ給

ふ。げんめい天わうよりくはうにん天わうまで七だいは、ならのみやこにおはします。しかるをくはんむ天わうゑんりやく三年十一月三日、ならのきやうかすがのさとより山しろの國がおかにうつりて、十年といひし正月、大なこんふちはらのをぐる丸、さんぎさ大べんきのふるさみ、大そうづげんけいつかはして、たうごくくずのこほり、うたのむらを見せらるゝに、りやうにんどもにそうしていはく、此ちのてい、さしやうりう、うびやくこ、ぜんしゆじやく、ごげんむ、四神さうおうの地、もつともていとをさだむるにたれりと申。よつておたぎのこほりにましますかも大みやう神につげて申させ給ひて、おなじくゑんりやく十三年十月廿一日にながをかの京よりこの京へうつりてのちは、ていわうは三十二だ、せいざうは三百八十よさ(の)いはるあきををくりむかふ。むかしよりだいくのていわう、くにくしよく、おほくのみやこをたてられしかども、かくのごとくすぐれたるちはなしとて、くはむ天わうことにしつしおぼしめす。大じんくぎやうしよだうのさい人におほせて、ちやうきうなるべきやうにとて、つちにて八しやくのにんぎやうをつくり、くろがねのようひかぶとをきせ、おなじくくろがねのゆみやをもたせて、ひがし山のみねにしむきにたてゝうづめられけり。まつだいに此京をたこくへうつす事あらじ、しゆご神となるべしとぞ御やくそくありける。されば天がに大事いでこんとては、このつかかならずなりどうず。しやうぐんづかといまにあり。くはんむ天わうと申は、平家のなうそにておはします。中にも此京をばへいあんじやうとなづけて、たひらかにやすきみやことかけり。もつとも平家のあがむべきみやこそかし。せんぞのみかどさしもに

せんびう―先妻。

しやうきやう―上卿。

たひらげて―貼じて  
(覺一本)。

しつしおぼしめされけるみやこそ、させるゆへなきにたこくたしよへうつされけるこそあさましけれ。へいじやう天わうないしのかみのすゝめによつて、すでに此京をたこくへうつさんとせさせ給ひしを、大じんくぎやうしよこくのにんみんなげき申せしかば、つゐにうつされずしてやみにき。一天のきみばんじやうのぬしだにもうつしえたまはぬみやこそ、にう道しやうこく、じんしむの身としてうつされけるぞおそろしき。これは國のいぞくせめのぼつて、平家みやこにあとをためず、山はやしにまじはるべきせんびうかとぞ人申ける。

おなじく六月八日ふくはらには、しんとの事はじめあるべしとて、しやうきやうに、とく大じどのさ大しやうさねさだのきやう、つちみかどのさいしやうちうじやうみちゝかのきやう、ぶぎやうにはどうのべんみつまさ、くらんどのさせうべんゆきたか、くはん人どもあひぐして、わだのまつばらのにしの野をたひらげてくじやうのちをわれけるに、一でうよりしも五でうまではそのところありて、五でうよりしもはなかりけり。ぎやうじくはんになんどもまいりて、此よしをそうもんしければ、さらばはりまのいなみのか、又津の國のこやのかなんどゝくぎやうせんぎありしかども、ことゆくべしとも見えざりけり。きうとをばすでにうかれぬ。しんとはいまだことゆかず。あるとしある人みなうきぐものおもひをなす。もと此ところにすむものはちをうしなひてうれへ、いまうつる人々は、とぼくのわづらひをなげきあへり。そうじてゆめのやうなる事どもなり。つちみかどのさいしやうの中じやうみちゝかのきやう申されけるは、いこくには三でうのくはうろをひらひて、十二のつうもんをたつと見えたり。いはんや



五でうのみやこになどかだいらたてざるべき。かつさとだいらをつくらるべしとて、五でうの大なごんくにつなのきやう、りんじにすはうの國を給はつて、さうしんせらるべきよし、にう道しやうこくはからひ申されけり。此くにつなのきやうは、ならびなき大ふくちやうじやにておはしければ、つくりいださん事はさうにをよばねども、いかでか國のつみえ、たみのわづらひなかるべき。さしあたる大じの大じやうゑなんどをおこなはるべきをさしをひて、かゝる世のみだれにみやこをうつし、だいらをつくらん事、すこしもさうおうせず。いにしへかしこき御よには、すなはちだいらにかやをふき、のきをだにもきられず、けぶりのともしきを見給ふときには、かぎりあるみつぎものをゆるしき。これすなはちたみをめぐみ、くにをたゞしふし給ふによつてなり。そはしやうくはのうてなをたて、れいみんをあらし、しんはあほうでんをたてて、天がみだるといへり。ばうじきらず、さいてんけづらず、しうしやかざらず、いふくあやなかりしもありけん物を、人おそろしくとぞ申ける。たうのたいそうは、りさんきうをつくりて、たみのつみえをはゞからせ給ひけん、つみにりんかうなふして、かはらにまつをひ、かきにつたしげりてやめられけるに、さういかなとぞ人申ける。

#### しんとのことはじめ

十月七日十一月  
十三日(覺一本)。

六月七日しんとの事はじめありて、八月十日むねあげ、十月七日御せんかうとさだめらる。きうとはあれゆく、いまの都ははんじやうす。あさましかりしなつもすぎ、あきにもすでになり

にけり。ふくはらにおはする人々の、あきもなかばに成ぬれば、めいしよの月を見んとて、あるひはげんじの大しやうのむかしのあとをしるびつゝ、すまよりあかしのうらづたひ、あはぢのせとををしわたり、えじまがいその月を見る。あるひはしらうら、ふきあげ、わかうら、すみよし、なには、たかきこのおのへの月のあけぼのを、ながめてかへる人もあり。きうとにのこる人々は、ふしみ、ひろさはの月を見る。そのうちにとく大じのき大しやうさねさだのきやうは、きうとの月をしていて、にう道しやうこくのかたへあんないえて、八月十日あまりにふくはらより、みやこのかたへのぼられけり。なに事もむかしにかはりはてゝ、のこるいゑはもんぜんくさふかく ていじやう露しげし。あさてふがはら、よもぎがそま、とりのふしどゝあれはてゝ、むしのこゑぐうらみつゝ、くはうぎくしらんの野べとぞなりにける。こきやうのなごりとは、このゑかはらの大みやばかりぞおはしける。さねさだのきやうその御しよへまいり、まづずいじんをもつてそうもんをたゝかせぬれば、うちよりをんなのこゑにて、たそや此よもぎふの露うちはらふ人もなきところにとがめければ、ふくはらより大しやうどの御まいりとぞ申ける。そうもんはじやうのさして候ぞや。ひがしおもてのこもんよりいらせ給へとありしかば、大しやうどのうちめぐりてぞまいられける。おりふし大みやは、むかしもや御したはしふおぼしめされけん、なんでんのかうしをあげさせ、御びはあそばしけるおりふし、大しやうつつとまいられたり。これはゆめかやうつゝかや、これへゝとぞめされける。源氏うちのみきには、うばそくのみやの御ひめ、あきのなごりをおしみつゝ、びはをしらべて夜もすがら心

をすまし給ひしに、ありあけの月のいでけるを、なをたえずやおぼしけん、ばちにてまねき給ひしも、いまこそおぼしめしられけれ。さ夜もやうくふけゆけば、大みやはきうとのあれゆく事共をかたらせおはしませば、大しやうはいまのみやこのすみよき事をぞ申されける。まつよひのこじゅうと申女ばうも、此御しよにぞ候はれける。そもく此女ばうをまつよひとめされける事は、あるとき大みやの御まへにて、まつよひとかへるあしたとはいづれかあはれはまされるぞと御たづねありければ、いくらも候はれける女ばうたちのうちに、かの女ばう、

まつよひのふけゆくかねのこゑきけばあかぬわかれのとりはものかは

と申たりけるゆへにこそ、まつよひのじゅうとはめされけれ。せいちのちあさきによつてこそ、こじゅうともめされけれ。大しやう此女ばうをよびいだし、いにしへいまの物がたりどもし給ひけるが、あかつきがたにもなりしかば、よこぶゑのねとりらうゑいして、きうどのあれゆく事共を、いまやうにこそうたはれけれ。

ふるきみやこをきて見れば、あさちがはらとぞあれにける、

月のひかりはくまなくて、あき風のみぞ身にはしむ

とをししかへし、二三べんうたひすまされたりければ、大みやははじめまいらせて、御しよ中の女ばうたち、みなかんるいをぞながしける。夜もあけければ、大しやういとま申ていでられけるが、御ともに候くらんどやすぎねをめして、じゅうがあまりになごりおしげに見えつるに、なんちゆきてなにともしひてこよとおほせければ、くらんどはしりかへりて、じゅうがま

やすぎねなし  
(第一本)

へにかしこまつて、これは大しやうどのより申せと候とて、

ものかはときみがいひけんどのねのけさしもなどかなしかるらん

じやうなみだををさへて、

またばこそふけゆくかねもつらからめあかぬわかれの通りのねぞうき

くらんどはしりかへつて、此よし申たりければ、大しやう、さればこそなんぢをばつかはしつれとて、大きにかんぜられけり。それよりしてぞものかはのくらんどゝはめされける。

### もつけのまき

そのころふくはらには、人々ゆめ見どもあしふ、つねは心さはぎのみして、へんげのものおほかりけり。あるときにう道のふし給へるところに、一けんにはゝかるほどの物いできたつて、入道をのぞひて見たてまつる。にう道すこしもさはぎ給はず、はたとにらまへてましゝければ、たゞきえにきゑうせぬ。又おかの御しよと申は、しんざうなれば、しかるべきたいばくもなかりけるに、ある夜たいばくのたふるゝをとして、二三千人がこゑにて、どつとわらふ事あり。これは天ぐのしよゐといふさたにて、ひきのぼんをよる百人、ひる百人そろへて、いさせらるゝに、天ぐのあるかたへむかひていたる時はをとせず、なきかたへむかひていたるときは、どつとわらひなんどしけり。あるあしたにう道しやうこく、ちやうだいよりいで、つまどをしひらき、つばのうちを見給へば、されたるかうべども、いくらといふかずをしらずみちゝて、

うへになりしたになり、ころびあひころびのき、中なるははしへころびいで、はしなるはなかへころび入、おびたゞしふからめきあひければ、にう道しやうこく、人やある／＼とめされけれ共、おりふし人もまいらず。こはいかにと見給へば、おほくのしやりかうべ共がひとつにかたまりあひて、たかさ四五ぢやうもやありけんとおぼしくて、一ツの大かしらに千まんのまなこあらはれて、にう道をにらまえて、またゝきもせず。にう道すこしもさはがずにらまえて、しばらくたゝれたり。あまりにつよふにらまれて、つゆじもなんどの日にあたりてきゆるやうに、とあかたもなくなりにけり。又にう道しやうこくのしゆくしよちかく、五えうのまつのかへたりけるが、夜のまにかれたりけるぞふしぎなる。又とねりあまたつけて、ひまなくなかはれけるむまのおに、一夜がうちにねずみすをくひこをぞうみたりける。これたゞ事にあらずとて、七人のおんやうじにうらはせられければ、おもき御つゝしみと申。此むまはさがみの國のぢう人、おほぼの三郎かげちかゞとう八かこく一のむまとて、入道しやうこくにまいらせたり。くろきむまのひたいしろかりければ、なをもち月とぞつけられける。やがておんやうのかみやすちにぞ給りける。むかし天ち天わうの御とき、れうの御むまのおに、ねずみすをくひこをうみたりしには、いこくのきうぞくほうきしたりけるとぞ日ほんぎにはしるされたる。又げん中なごんまさよりのきやうのもとに候ひつるあをさぶらひが見たりしゆめも、おそろしかりけり。たとへば大りのじんぎくはんとおぼしきところに、そくたいたゞしき上らうたちのあまたなみゐて、ぎぢやうのやうなる事のありけるに、ばつぎなる人の平家のかたふどするか

(マ、)

とおほしきを、その中よりをつたてらる。かのあをさをさぶらひ、ゆめのうちなれば、いかなる上らうにてましますやらんと、あるらうおうにとひたてまつれば、いつくしまの大みやう神とこたえ給ふ。そのゝちぎじやうにけだかげなるらうおうのおはしけるが、此日ごろ平家にあづけつるせつたうをばいまはいづの國の人よりともにたぶとおほせければ、又かたはらにしゆくらうのましゝけるが、そのゝちはわがそんなにもたび候へとおほせらるゝといふゆめを見て、しだいにとひたてまつるに、せつたうをよりともにたぶとおほせられつるは、八まん大ぼさつ、そのゝちわがそんなにもとおほせられしは、かすが大みやう神、かう申はたけうち大明神とこたへらる。此ゆめを人にかたるほどに、入道きゝつけ給ひて、つのはうぐはんもりずみをもつて、まさよりのきやうのもとへ、ゆめ見のあをさぶらひいそぎこれへとありければ、かのあをさぶらひやがてちくでんしてけり。まさよりのきやういそぎにうだうしやうこくのところへゆきむかひ、さまゝになだめ申されれば、なにとなくうちまぎれて、そのゝちはさたもなかりけり。ひごろは平家天がのしやうぐんにて、てうてきをしづめしかども、いまはちよくめいにそむけばにや、せつたうをもめしかへされぬ。心ほぞふぞきこえける。中にもかうやにおはしけるさいしやうにう道なりより、此事どもをつたへきひて、すはや平家のよはすゑになるござんなれ。いつくしまの大みやう神の、平家のかたふどをしたまひけるは、そのいはれあり。たゞししやかつらりうわうのだい三のひめみやなれば、によ神とこそうけ給はれ。そくたいて見え給ふこそ心ゑねとの給ひければ、あるそのの申けるは、それわくはうすいじやくの

つのはうぐはん  
源大夫判官  
季貞(覺一本)。

はうべんまち／＼なれば、三みやう六つうのみやう神にて、あるときはぞくたいともげんじ給はん事かたかるべきにあらずとぞ申されける。うきよをいとひ、まことのみに入ぬれば、わうじやうごくらくのいとなみのほか、たじやはあるべきなれども、ぜんせいをきゝてはかんに、あくじをきゝてはなげく。これみなにんげんのならひなり。

よりともむほん

同九月二日さがみの國のちう人、大ばの三郎かげちか、ふくはらへはやむまをもつて申けるは、さんぬる八月十七日、いづの國の人さきのうひやう衛のすけよりとも、しうとほうでうの四郎をつかはして、いづのもくだいいづみのはんぐはんかねたかを、やまきがたちにて夜うちにする。そのゝちどひ、つちやま、おかざきをはじめとして、いづさがみのつはもの三百よき、よりともにかたらはれて、さがみの國いしばし山にたてこもつて候ところに、かげちかみかたに心ざしをぞんずるもの共三千よきいんそつして、をしよせせめ候ほどに、ひやう衛のすけ、七八きにうちなされ、大わらはにたゝかひなつて、どひのすぎ山へにげこもり候ぬ。はたけ山しやうじ次郎五百きにてみかたをつかまつる。みうらのおほすけよしあきらがこども三百よき、げんじがたをして、たぬ、こつぼのうらにてたゝかふ。はたけ山いくさにまけて、むさしの國へひきしりぞく。そのゝちはたけ山の一ぞく、かはごえ、いなげ、をやまだ、えど、かさい、そのほか七たうのつはものども三千よき、みうらのきぬがさのじやうにをしよせて、一日一夜せ

たる―由井。

め候ほどに、おほすけうたれ候ぬ。こどもくりはまのうらよりふねにのり、あは、かづさにわた  
りぬとこそ申たれ。

平家の人々これをきゝて、みやこうつりもはやきうさめぬ。わかきくぎやうてん上人は、さ  
らばとくしてことのいでこよかし、うちてにむかはんなんど、いふぞおろかなる。又はたけ山  
の次郎みうらのいくさしたりける事は、ちゝのしやうじしげよし、おちを山だのべつたうがお  
りふしぎいきやうしたりけるをたすけんためとぞご日にはきこえし。はたけ山しやうじしげよ  
し、を山だのべつたうありしげ、うつのみやさゑもんのじうともつな、これら三人はおほばん  
やくにて、おりふしぎい京したりけるを、大じやうにう道いかつて三人をめしよせ、げんじに  
どうしんせじといふきしやうもんをかきてまいらせよとの給へば、かしこまつてぞしたゝめま  
いらせける。はたけ山しやうじ申けるは、ひが事にてぞ候らん。したしふ候へば、ほうでうな  
んどはもしさもや候。そのほかはよもてうてきにどうしんはつかまつり候はじ。いまきこしめ  
しなをさんずる物をと申けれども、いやゝ大事にをよびぬとさゝやく物もおほかりけり。に  
う道しやうこくいかられるやうなゝめならず、よりともをばしぎいにおこなふべかつしを、  
いけどのゝしゐてなげき給ひしあひだ、じひのあまりにるざいになだめしを、そのおんをわす  
れて、たうけにむかつてゆみをひくこそあんなれ、しんめい三ぼうも、いかでかゆるし給ふべ  
き。た(ゞ)いま天のせめをかうぶらんずるひやう急のすけなりとぞの給ひける。それわがて  
うにてうてきのはじめをたづぬるに、ひのもとといはゝれひこのぎよう四年、きの國なぐさのこ



大つのまとり  
大友貞鳥（覺一本）。

くない―宮田  
（覺一本）。

ながやとよなり―なし  
（覺一本）。

ほり、たかおのむらにひとつのくもあり。身みじかくあしながふして、ちから人にすぐれた  
り。にんみんおほくそこなひしかば、くはんぐんはつかうして、せんじをよみかけ、かづらの  
あみをむすんで、つみにこれををほひこらす。それよりこのかた、やしんをさしはさんでう  
みをほろぼさんとするもの、おほいしの山丸、おほ山のわうじ、大つのまとり、もりやの大じ  
ん、山だのいしかは、そがのいるか、ぶんやのくない、たちばなのいつせい、ひのかみかはつ  
ぐ、いよのしんわう、だざいのせうにひろつぐ、ゑみのをしかつ、さうらのたいし、井のうへ  
のくはうぐう、ふちはらのなかなり、たひらのまさかど、ふちはらのすみとも、さ大じんなが  
や、う大じんとよなり、あべのさだたうむねたう、つしまのかみみなもとのよしちか、あくさ  
ふ、あくゑもんのかみにいたるまで、すべて甘よ人なり。されども一人としてそくはいをとぐ  
るものなし。みなかばねをさんやにきらし、かうべをごくもんにかけらる。いまよこそわう  
あもむげにかろけれ。むかしはせんじをむかひてよみければ、かれたるさうもくも花さきみな  
り、そらとぶとりまでもしたがひきたる。中ごろの事ぞかし。ゑんぎのみかどしんせんゑんへ  
御かうなつて、いけのみぎはにさぎのあたりけるを、六あをめして、あゝさぎとつてまいれ  
とおほせければ、いかでかこれをとるべきやとはおもひけれども、りんげんなればあゆみむか  
ふ。さぎははねつくろひしてたゝんとす。せんじぞ、まかりたつなといひければ、さぎひらみ  
てとびさらず。これをいだめてまいりたり。みかどゑいらんあつて、なんちがせんじにしたが  
ひてまいりたるこそしんめうなれとて、やがて五みにぞなされける。けふよりのちさぎのうち

いたし礼。

のわうたるべしといたをあそばして、くびにかけてぞはなせおはします。これまつたくさぎの御ようにはあらず、たゞわうみのほどをしらしめされんがためなり。

かんやうきう

らうしー孔子  
(覺一本)。

めいけんー冥顯。

いこくにむかしのせんじうをたづぬれば、ゑんのたいしたん、しんのしくはうにとらはれて、いましめをかうぶる事十二年、ゑんたんなみだをながして、われほんこくにらうばあり。ざんじのいとまをたびてましかば、かれを見んとぞ申ける。しくはうはあざわらひて、なんぢにいとまたばん事は、むまにつのをひ、からすのかしらしろふならんときをまつべしとぞの給ひける。ゑんたん天にあふぎ地にふして、ねがはくはかうくの心ざしをあはれみ給ひて、むまにつのをひからすのかしらしろふなつて、いまどこきやうにとゞめをきしらうばを見んとぞいのりける。かのめうをんばさつは、りやうぜんじやうどにまふで、ふかうのともがらをいましめ給ふ。らうし、がんくはいは、しんだんにいで、ちうかうのみちをはじめ給ふ。めいけん三ぼう、かうくの心ざしをやあはれみおぼしめしけん、むまにつのをひきう中にきたり、からすのかしらしろふなつていぜんの木にあたる。からすのかしら、むまのつの、へんずるにおどろひて、しくはうてい、りんげんかへ(ら)ざる事をしんじて、ゑんたんをなだめてほんこくへこそかへされけれ。しくはうていなをにくみ給ひて、しんとゑんとのかかひに、そこくといふてあり。大きなかはながる。かのかはにわたせるはしをばすなはちそこくばしといふ。み

てありー國あり  
(覺一本)。

かどくはんぐんをつかはして、ゑんたんがわたらんどき、はしをふまばおつるやうにしつらふて、たいしたんをわたされけり。なじかはよかるべき。かはなかにしておち入ぬ。されども水にもおぼれず、へいちをゆくがごとくにして、むかひのきしにぞつきにける。こはいかにとうしろをかへり見ければ、かめどもいくらといふかずをしらず、みづのうへにうきて、こうをならべてぞあゆませける。これはかう／＼の心ざしをめいけんあはれみ給ふによつてなり。さればゑんたんうらみをふくみて、しくはうていにしたがはず。みかどいかつてくはんぐんをつかはしてうたんとし給ふほどに、ゑんたんをそれおのゝきて、けいかといふつはものをかたらふ。けいか又大じんにでんくはうせんじやうといふつはものをかたらふ。かのでんくはうが申けるは、きみは此身のわかふさかんなるときをしろしめして、たのみおぼしめし候か。きりんもおひぬればどばにもをとれり。いまはいかにもかなふまじ。つはものをかたらふてたてまつらんとていでけるに、けいか、でんくはうがそでをひかへて、あなかしこ、此事人にひろうすなといひければ、人にうたがはれぬるにすぎたるはぢはよにあらじ。もし此事もれぬるものならば、われうたがはれなんもはづかしとて、けいかゞまへにてじがいてこそうせにけれ。

またはんゑきといふつはものあり。これはしんの國のものなりけるが、しくはうていのため、おやおちきやうだいをほろぼされて、ゑんの國にけこもりたり。しくはうてい四かいにせんじをくだして、ゑんのさしづならびにはんゑきがかうべをはねてまいりたらん物には、五百さんのこがねをほうせんとひろうせらる。けいかはんゑきがもとにゆきて、われきくなんち

がかうべすでに五百きんにほうぜられたんなり。なんぢがくびわれにかせ。しくはうていにたてまつらん。よろこびて見給はんととき、けんをぬひてむねさゝん事やすかりなんといふ。はんゑきおとりあがり、大いきつゐて申けるは、われしくはうのためにおやおちきやうだいをほろぼされて、夜るひるこれをおもふに、こつずいにとをしてしのびがたし。なんぢまことにしくはうていをほろぼすべくんば、かうべをあたへん事、ぢんかいよりもなをかろしとて、みづからかうべをきつてぞしにける。又しんぶやうといふつはものあり。これもしんの國のものなりけるが、十三のしかたきをうつて、ゑんの國ににげこもりたり。ならびなきつはものなり。

ちうしー調子。

わらつてむかふときは、ゑいじまでもいだから、いかつてむかふときは、大のおともたえ入ぬ。これをしんのみやこのあんないしやにかたらひてゆく。あるかた山のほとりにしゆくしたりけるが、そのほとりにくはんげんするをきゐて、ちうしをもつてほんゐの事をうらなふに、かたきのかたは水なり。わがかたはひなり。さるほどに天もあけぬ。さう天ゆるし給はねば、はくこう日をつらぬめてとをらず。われほんゐをとげん事ありがたとぞ申ける。さりながらこれよりかへるべきにもあらずとて、しくはうていのかんやうきうにいたりぬ。はんゑきがかうべならびにゑんのさしづをもちてまいりたるよしをそうもんす。しんかをしてうけとらんとし給へば、人づてにはまいらせまじ。ちきにこそたてまつらめと申せば、さらばとてせちゑのぎをとゝのへて、ゑんのつかひをめされけり。かんやうきうと申は、みやこのまはり一まんり。だいは地のうへ三里たかふつきあけて、ちやうせいでんあり。ふらうもんあり。こがねをも

一まん一萬八千  
三百八十里(覺一本)。

しゆを―死を。  
でんしや―田舎。

つて日をつくり、しろがねをもつて月をつくれり。しんじゆのいさご、るりのいさご、こがねのいさごをしきみてり。四ほうにはたかさ四十ちやうにくろがねのつみぢをつき、でんじやうにもおなじくくろがねのあみをぞはりたりける。これはめいどのつかひをいれじとなり。あきはたのものかり、こしちへかへるにも、ひぎやうじぎいのさはりあれば、つみ地にはがんもんとなづけて、くろがねのもんをあけてぞとをしける。そのうちにあはうでんとて、しくはうつねにぎやうがうなつて、せいだうをおこなはせ給ふでんなり。たかさは三十六ちやう、とうざいへ九ちやう、なんぼくへ五ちやう、大ゆかのしたには、五ちやうのはたばこをたてたるが、なををよばぬほどなり。うへはるりのかはらをもつてふき、したはこがねしろがねにてみがけり。しんぶやうは、はんゑきがかうべをもち、けいかはゑんのさしづをいれたるはこをもつて、二人つれてたまのきざはしをのぼりあがる。あまりに大りのおびたゞしきを見て、しんぶやうわな／＼とふるひたりければ、しんかあやしんで、ぶやうはむほんの心あり。けい人をばきみのかたはらにをかず。くんしはけい人にちかづかず。ちかづくときんば、しゆをからんずるみちといへり。けいかたちかへりて、ぶやうまつたくむほんの心なし。たゞでんしやのいやしきにのみならひて、くはうきよにいまだなれざるゆへに、心めいわくすといへり。そのときしんかみなしづまりぬ。すでにみかどにちかづきたてまつりて、はんゑきがかうべ、ゑんのさしづをたてまつる。これをひけんあるところに、さしづを入たるはこのそに、ひしゆといふけんをおさめてもちたりけるが、こほりなんどのやうにして見えけるほどに、しくはうていこ

れを見て、やがてにげんとし給ふに、けいかそでをむずとひかへて、けんをむねにさしあてたり。すまんのぐんびやうていじやうにそでをつらぬといへども、すくはんとするにちからなく、たゞ此君ぎやくしんにおかされ給はん事をのみぞかなしみあへる。しくはうてい、ねがはくはわれにざんじのいとまをえさせよ。さいあいのきさきのことのねをいま一どきかんとの給へば、けいか、へんじのいとまをたてまつる。しくはうていは三千人のきさきあり。その中にくはやうぶにとて、すぐれたることの上ずまし／＼き。をよそ此きさきのことをきゐては、ものゝふのたけくいかれるもすなはちやはらぎ、さうもくもゆるぎ、とぶとりもおつるほどなり。いはんやいまをかぎりのゑいものにそなへむとて、きさきなく／＼ひき給ひけり。さこそはおもしろかりけめ。けいかもかうべをうなだれ、みゝをそばだて、ほとんどぼうしんのおもひはやわすればてぬ。きさきかさねて一きよくをそうせらる。七せきのへいふうはたかく共、おどらばなんぞこゑざらん。られうのたまとはひかばなどかたえざらんとひき給ふ。けいかはこれをきゝしらず。みかどこれをきゝしりて御そでをひききり、七せきのへいふうをおどりこえて、あかがねのはしらのかげにぞにげかくれ給ひける。けいかいかつてけんをなげかけたまつる。おりふしばんのいしの御せんに候けるが、くすりふくろをけんにもぎとかけあはせたり。つるぎはくすりのふくろをかけられながら、くち六しやくのあかがねのはしらを、なかばまでこそきりたりけれ。けいかつるぎを二ツともたねばつゞめてもなげず。みかどたちかへり、わがけんをめしよせて、けいかをば八ツぎきにこそせられけれ。しんぶやうもきられぬ。やがてく

はんぐんをつかはして、ゑんたんもほろぼさる。しんのしくはうはのがれて、ゑんたんつみにほろびにけり。さればいまのよりとも、きこそあらんずらめとしきだいする人もおほかりけれ。

もんがく

しげとを―茂蓮。

そもくひやう衛のすけよりともは、さんぬるへいち元年十二月、ちゝさまのかみよしどものむほんによつて、しやうねん十四さいと申せし、ゑいりやく元年三月廿日、いづの國ひるがこじまへながされて、廿よねんのはる秋ををくり、としごろ日ごろもこそありけれ、ことしいかなる心にて、むほんをおこされけるといふに、たかおのもんがくしやうにんの申すゝめられたりけるとかや。かのもんがくと申は、わたなべのゑんどうさこんのしやうげんしげとをがこ、ゑんどうむしやもりとをとて、上さいもんみんのしゆなり。十九のとしだうしんをおこししゆつけして、しゆぎやうにいでんとしけるが、しゆぎやうといふはいかほどの大じやらん、ためしに見んとて、六月の日のくさもうごかすてつたるに、かた山のやぶの中にはひ入て、あをのきにふし、あぶぞ、かぞ、はちありなんといふどくちうどもが、身にひしとりつきて、さしくひなんどしけれども、ちども身をばうごかさず。七日まではおきもあがらず、八日といふにおきあがりて、しゆぎやうといふは、これほどの大じかと人にとへば、それほどならんには、いかでかいのちもいくべきといふあひだ、さてはやすき事ごさんなれとて、しゆぎやうにぞいでにける。くまのへまいり、なちこもりせんとしけるが、まづぎやうのこゝろみに、きこふるたき

にしばらくうたれてみると、たきのもとへまいりければ、ころは十二月十日あまりの事なるに、ゆきふりつもりつらゝみて、たにのをがはもとせず、みねのあらしふきこほり、たきのしらいたるひとなりて、みなしろたへにをしなべて、よものこずゑも見もわかず。しかるにもんがくたきつぽへおりひたり、くびまでつかりてじくのじゆをみてけるが、二三日こそありけれ、四五日にもなりければ、ころへずして、もんがくうきあがりにつけり。すせんちやうみなぎりおつるたきなれば、なじかはたまるべき。さつとをしおとされて、やひばのごとくにしもきびしいはつぽの中を、うきぬしづみぬ五六ちやうこそながされたれ。ときにいつくしげなるどうじ一人きたりて、もんがくがさうのとつてひきあげ給ふに、人きどくのおもひをなし、ひをたきあぶりなんどしければ、ぢやうごうならぬいのちではあり、ほどなくいきいでにけり。もんがくすこし心つきて、大のまなこを見いからかし、われ此たきに三七日うたれ、三らくしやをじゆせんとおもふ大々はんあり。こん日わづかに五日になる。七日にだにもすぎざるに、なにものがこゝへはとつてきたるぞといひければ、人身のけよだつて物いはず。又たきつぽにたちかへりてうたれけり。二七日といふに八人のどうじきたりて、もんがくがさうのとをとらへてひきあげんとし給へば、さんぐにくみあひてあがらず。三七日といふに、もんがくつめにはかなくなりにつけり。たきつぽをけがさじとやびんづらゆふたるどうじ二人、たきのうへよりくだつて、もんがくがちやう上よりしゆそくのつまさきてのうらにいたるまで、よにあたゝかにかうばしき御てをもつて、なでくだし給ふとおぼえければ、ゆめの心ちしていき



きうり—嶺里。

しうとく—稱徳。

いで、そも／＼いかなる人にてましませば、これほどにいつくしみ給ふらんとひたてまつるに、われはこれ大しやうふどうみやうわうの御つかひに、こんがら、せいたかといふ二どうじなり。もんがくむじやうのぐはんをおこしてゆうまうのぎやうをくはだつに、ちからをあはすべしとのみやうわうのちよくによつてきたるなりとこたへ給ふ。もんがくこゑをいからかして、みやうわうはいづくにぞ。とそつ天にとこたへて、くもみはるかにのぼり給ひぬ。たなごゝろあはせてこれはいしたてまつる。さればわがぎやうをば大しやうふどうみやうわうまでもしろしめされたるにこそとたのもしふおぼして、なをたきつばにたちかへりてうたれけり。まことにめでたきずいさうどもあまたあり。ふきくる風も身にします、おちくる水もゆのごとし。かくて三七日の大ぐはんつゐにとげければ、なちにせん日こもり、大みね三ど、かつらぎ二ど、かうや、こがは、きんぼうせん、しら山、たて山、ふじのたけ、いづ、はこね、しなののがくし、ではのはぐろ、そうじて日ばんこくのころともなくゆきまはり、さすがなをきうりやこひしかりけん、みやこへのぼりたりければ、とぶとりもいのりおとす、やいばのげんじやとぞきこえし。のちにはたかおといふ山のおくにおこなひすましてゐたりけり。かのたかおにじんごんじといふ山であり。むかししうとく天わうのぎよう、わけのきよ丸がたてたりしがらんなり。ひさしくしゆぎうなかりしかば、春はかすみにたちこもり、又あきはきりにまじはり、とぼそは風にたふれて、おちばのしたにくち、いらかはあめつゆにおかされて、ぶつだんさらにあらはなり。ちうちのそもなければ、まれにさし入物とは、月日のひかりばかりな

り。もんがくこれをいかにもしゆぎうせんといふ大ぐはんをおこして、くはんじんちやうをさゝげて十ばうだんなをすゝめありきけるほどに、あるときみんの御しよ、ほうぢうじどのへぞまいりける。御ほうかあるべきよしそうもんしけれども、御あそびのおりふしにて、きこしめしいれず。もんがくは天せいふてきだい一のあらひじりなり。御ぜんのこつないやうをもしらず、たゞ人が申いれぬぞと心ゑて、ぜひなく御つぼのうちへみだれ入、大をんじやうをあげて、大じ大ひの君にてまします。かぼとの事などかきこしめしいれざるべきとて、くはんじんちやうをとりいだし、たからかにこそよふだりけれ。

しやみもんかくうやまつて申、ことにきせんどうぞくのじよじやうをかうぶつて、たかをさんのれいちに一みんをこんりうし、二せあんらくの大りをこんぎやうせん事をこふくはんじんのじやう。

それおもんみればしんによくほう大なり。しやうぶつのけみやうをたつるといへども、ほうしやうずいまうのくもあつくをほつて、十二いんゑんのみねにそびえしよりこのかた、ほんうしんれんの月のひかりかすかにして、いまだ三どく四まんのたいきよにあらはれず。かなしひかなや、ぶつじつはやくぼつして、しやうじるてんのちまためいゝたり。いたづらに人をそしりほうをほしる。これあにゑんまごくそつのせめをまぬかれんや。こゝにもんがくたまゝぞくぢんうちらはひてほうゑをかざるといへども、あくごうなを心にたくましふして、日夜ぜんべうをつくるに、又みゝにさかふてうぼにすたる。いたましきかなや、二たび三

けうほう―顯章  
(覺一本)

よしみなふして―こと  
なうして(覺一本)

一きよしん―紙半銭  
(覺一本)

づのくはきやうにかへり、ながく四しやうのくりんをめぐらん事を。このゆへにむにのけう  
ばうせんまんのちくく、ぶつしゆのいんゑんをあかして、しじやうのほう、一つとして  
ぼだいのひがんにぞくせずといふ事なし。かるがゆへにむじやうのくはんもんになんだをお  
とし、上下のしんぞくをもよをし、上ぼんれんだいにゑんをむすび、どうめうかくわうのれ  
いちやうをたてんとなり。それたかをさんは、山たかふしてしかもじゆほうのこずゑをあら  
はし、たにふかふしてしやうざんのほらのこけをしけり。がんせんむせんでぬのをひき、れ  
いゑんさけんでえだにあそぶ。じんりとをくしてかうちんなし。しせきよしみなふしてしん  
ぐあり。ちぎやうもつともすぐれたり。ぶつてんをあがむべし。ほうがすこしなり共、た  
れかじよじやうせざらん。ほのかにきく、いさごをあつめてぶつたうとす。つゐにじやうぶ  
つのくはをかんず。いはんや一きよしのきふにをひてをや。ねがはくはこんりうじやうぶ  
ゆして、きんけつのほうりき、御ぐはんゑんまん、ないしとひゑんきんのりみんしんそ、ぎ  
うしゆんぶゐのくはをうたひ、ちんえふさいくはいのゑみをひらかん事、ことに又しやうり  
やうゆうぎ、せんご大小、一ぶつしんもんのうてなにいたらん。かならず三しんまんどくの  
月をもてあそばん。よつてくはんじんしゆぎやうのおもむき、けだしもつてかくのごとし。  
ちしう三年三月日、そうもんがく

とこそよみたりけれ。おりふし御ぜんには、大じやう大じんめうをんゐん、びはかきならし、ら  
うゑいめでたくせさせ給ふ。あぜちの大なごんすけかたのきやうひやうしをとつて、ふうぞく

ちうしー調子。

さいばらをうたはれけり。むまのかみすけとき、じゅうもりさだ、わごんかきならし、いまやうとりぐにうたい、ぎよくれんきんちやうさゝめひて、まことにおもしろかりければ、ほうわうもつけてうたはせおはしますところに、もんがくが大をんじやうにちうしもちがひ、ひやうしもみなみだれにけり。なにもものぞや、しやつくびつけとおほせくださるゝほどこそあれ、はやりおのものども、われもくどすゝみける中に、すけゆきのはんぐはんといふものはしりいで、なんでうことを申ぞ、まかりいでよといひければ、たかをのじんごじにしやうをよせられざらんほどは、まつたくもんがくいでまじとて、うごかず。よりてそくびつかんとしければ、すけゆきはんぐはんがゑぼしをはたとうつてうちおとし、こぶしをにぎり、しやむねをつめて、あふのけにつきたふす。すけゆきはんぐはんおめくゝともどりはなつて、大ゆかのうへににげのぼる。そのゝちもんがくふところより、むまのおにてつかまきたるかたなのこぼりのやうなるをぬきいだして、よりこんものをばつかんとこそましかけたれ。ひだりのてにはくはんじんちやう、みぎのてにはかたなをぬひて、はしりまはるあひだ、おもひまうけぬにはか事にてはあり、さうのてにかたなをもちたるやうにぞ見えたる。くぎやうてん上人も、此ものいかにくゝとて、さはぎあはれければ、御あそびもはやあれにけり。あんのさうどうなゝめならず、あんどやむしやありむね、そのころたうしよくのむしやどころにてありけるが、何事ぞとてちをぬめてはしりいでたり。もんがくよろこんでかゝるところに、きりてはあしかりなんとやおもひけん、たちのみねをとりなをし、もんかくがかたなもちたるこがいなをしたゝかにうた

ありむね―右宗  
(第一本)

うた―うつ。うたの誤。

れて、ちとひるむところに、たちをすて、ゑひやおふとくみたりけり。くまれながらもんがくあんどうむしやがひちをつく。つかれながらしめたりけり。たがひにをとらぬ大ぢからにてありければ、うへになりしたになりころびあふところに、かしこがほに上下よりて、もんがくがはたらくところをうちはりしてんげり。されどもこれをことゝもせず、いよゝゝあくこうはうげんす。もんのほかへひきいだして、ちやうのしもべにたぶ。ひつばられてたちながら、御しよのかたをにらまへて、ほうがをこそ給はらざらめ、これほどもんがくにからひめを見せ給ひつれば、おもひしらせ申さんずる物を。三がいほくはたくなり。わうぐうといふとも、そのなんのがるべからず。十ぜんのていぬにほこらせ給ふとも、くほうせんのたびにいでなんのちは、ごつめづのせめをばまぬかれ給はじと、おどりあがりゝぞ申ける。此ほうしきつくはいなりとて、やがてごくちやうせられけり。すけゆきはんぐはんは、ゑぼしうちおとされてはちがましさに、しばらくはしゆつしもせず。あんどうむしやは、もんがくくみたるくはんしやうに、たうざいらうをへずして、むまのじうにぞなされける。さるほどにそのころ、みふくもんおんかくれさせ給ひて、大しやありしかば、もんがくほどなくゆるされけり。しばらくはたかをのほとりにおこなひてあるべかりしを、さはなくして、又くはんじんちやうをさゝげすゝめけるが、さらばたゞもなふして、あはれこのよの中はたゞいまみだれて、君もしもみなほろびうせんずる物を、なんど、申ありくあひだ、此ほうしみやこにをひてはかなふまじ。をんるせよとて、いづの國へぞながされける。源三お入道のちやくしなかつな、そのころいづのかみ

にておはしければ、そのさたとして、どうかいだうよりふねにてくださいべしとて、いせの國へをくりてゆきけるが、はうべんりやう三人をぞつけられたる。これら申けるは、ちやうのしもべのならひ、かやうの事につめてこそゑこも候へ。いかにひじりの御ばう、これほどの事にあひてをんごくへながされ給ふに、しる人はもたせ給はぬか。どさんらうれうのごとくの物をこひ給へかしといひければ、もんがくはさやうのようの事いふべきとくももたず。ひがし山のへんにこそとくみはあるが、さらばふみをつかはさんといふ。けしきあるかみをたづねてえさせたり。かやうのかみに物かくやうなしとて、なげかへす。さらばとてあつがみをたづねてえさせたり。もんがくいかつて、ほうし物をえかゝぬぞ。をのれらかけとてかゝする。もんがくこそ、たかをのじんごじくやうの心ざしありてすゝめ候ひつるが、此君のよにしもあひて、しよぐはんをこそじやうじゆせざらめ、きんごくせられて、あまつさへいづの國へるざいせらる。ゑんちのあひだにて候に、どさんらうれうのごときの物どもたいせつに候。此つかひに給るべしとかけといひければ、いふまゝにかひて、さてたれどのへとかき候はんぞや。きよみづのくはんをんばうへとかけ。これはちやうのしもべをあざけるにこそと申せば、もんがくはくはんをんをこそふかくたのみたてまつたれ。さらばたれにかやうの事やいふべきぞとの給ひける。いせの國あの、津よりふねにのせくだりけるが、とをたふみ天わうのなだにて、大風ふき大なみたちてすでに此ふねうちかへさんとす。すいしゆかんどりいかにもしてたすからんとしけれども、なみ風いよゝあられれば、あるひはくはんをんのみやうがうをとなへ、あるひは

くらく空しくか。

さいごの十ねんにをよぶ。されどももんがくこれをことゝもせず、たかいびきかひてねたりけるが、すでにかうとおぼえけるとき、かつばとおき、ふねのへいたにたつて、おきのかたをにらまへて、大をんじやうをあげ、りうわうやあるくどぞよびたりける。いかにこれほどに大ぐはんおこしたるひじりがのつたるふねをばあやまたふとはするぞ。たゞいま天のせめをかうぶらんずるりうわうどもかなとぞ申ける。そのゆへにや、なみ風ほどなくしづまりて、いづの國へぞつきにける。もんがく京をいでし日より、きせいする事あり。われみやこにかへつて、たかをのじんごじぎうりうくやうすべくんば、しすべからず。そのぐはんくらくなるべくは、みちにてしすべしとて、京よりいづへつきにけり。おりふしじゆんぶうなければ、うらづたひしまづたひして、三十一日があひだは一かうだんじきにてぞありける。されどもきりよくすこしもをとらず、おこなひうちしてゐたりけり。まことにたゞ人にてはなかりけりとおぼゆる事どものみおほかりけり。こんどう四郎くにたかといふものにあづけられて、いづの國なごやのおくにぞすまぬける。さるほどにひやう衛のすけへつねにはまいりて、むかしいまのものがたりども申て、なぐさむほどに、ひやうゑのすけにあるときもんがく申けるは、平家にはこまつのおとゞこそ心もがうにはかり事もすぐれておはせしか。平家のうんめいすゑになりぬるやらん、きよねんの八月こうぜられぬ。源平の中に、わどのほどしやうぐんのさうもちたる人はなし。はやくむほんおこひて日ぼんこくをしたがへ給へ。らいてう、此ひじりの御ばうは、おもひもよらぬ事をの給ふ物かな。われはこいけのあまにかひなきいのちをたすけられて候へ

ば、そのごせをとぶらはんために、まい日ほけきやう一ぶどくじゆするよりほかはたじなしとぞの給ひけれ。天のあたふるをとらざればかへつてそのわざはひをうく。ときいたつておこなはざればかへつてそのとがをうくといふほんもんあり。かう申せば、心をみんとて申らんとおもひ給はんか。御へんに心ざしのふかゝりしを見給ふべしとて、しろひぬのにてつゝみたるどくろを一ツとりいだす。ひやうゑのすけ、あれはいかにとの給へば、これこそわどのゝちゝさまのかみどのゝかうべよ。へいちのかつせんゝちは、ごくしやのこけのしたにうづもれて、ごせとぶらふ人もなかりしを、もんがくぞんずるむねありて、ごくもりにこひて、此十四ねんくびにかけて、やまゝてらゝおがみめぐり、とぶらひたてまつれば、いまは一ぐうもたすかり給ひぬらん。さればもんがくはこかうのとのゝ御ためにもほうこうのものにてこそ候へと申ければ、ひやう衛のすけ、一ちやうそれとおぼえねども、ちゝのかうべときくがなつかしさに、まづなみだをぞながされける。そのゝちはうちとけて物がたりをぞし給ふ。そもゝよりともちよくかんをゆるされずしては、いかでかむほんをおこすべきとの給へば、それやすき事なり。やがてまかりのぼり申ひらひてまいらせんといひければ、さ申御ぼうもちよくかんの身にて、人を申ゆるさんとの給ふあてがひこそ、大きにまことしからね。もんがく、わがみのちよくかんをゆるさふと申さばこそひが事ならめ。わどのゝ事申さんは、なにかくるしからん。いまのみやこふくはらへのぼらんは三日にすぐまじ。めんぜんうかがはんに、一日のどうりうぞあらんずらむ。つがう七日八日にはすぐまじとて、つといでぬ。なごやにかへつて、で



しどもには、いづの御山にしのんで七日さんろうの心ざしありとていでぬ。げにも三日といふに、ふくはらのしんとへのぼりつく。さきのひやう衛のかみつよしのきやうのもとにいさゝかゆかりありければ、そこにゆきて、いづの國のるにんさきのひやう衛のすけよりともこそ、ちよくかんをゆるされて、みんぜんをだに給はらば、八かこくのけにんどももよをしあつめ、平家をほろぼして天がをしづめんと申候へ。みつよしのきやう、いさとよ、たうじわがみも三くはんともとどめられて、心ぐるしきおりふしなり。ほうわうをしこめられてわたらせ給へば、いかゞあらん。さりながらうかうひてこそ見めとて、ひそかにそうもんせられければ、ほうわうやがてみんぜんをこそくだされけれ。もんかくこれをくびにかけ、又三日といふにいづの國へくだりつく。うひやう衛のすけ、あはれ此ひじりの御ばうになまじぬによしなき事を申い出して、よりとも又いかなるめにかあはんずらんとおもはぬ事もなく、あんじつゞけておはしますところに、八日といふむまのこくばかりにくだりつきて、こはみんぜんよとてたてまつる。ひやうゑのすけこれを見て、天にあふぎ地にふしおほきによろこびて、いそぎてうづうがひし、あたらしきじやうゑをき、三どはいしてひらかれたり。

なに／＼くだすじやうにいはく、みぎきやうねんよりこのかた、平じ、くほうかをべちじよし、せいだうにはゞかる事なく、ぶつぼうをはめつし、てうみをほろぼさんとす。それわがてうはしんこくなり。そうべうあひならんでしんとくこれあらたなり。かるがゆへにてうていかいきのゝち、すせんよさいのあひだ、ていぬをかたぶけ、こくかをあやうふせんとする

もの、みなもつてはいぼくせずといふ事なし。しかるときんば、かつはしんたうのめいじよにまかせ、かつはちよくせんのししゆをかうぶる。はやく平氏の一のいをほろぼし、てうかのおんてきをしりぞけ、ふだいきうせんへのいりやくをつぎ、るいそほうこうのちうきんをぬきんで、身をたてゐるをおこすべし。てあればみんぜんかくのごとし。よつてしつたつくだんのごとし。ちしう四年七月日、みつよしうけたまはる。さきのひやう衛のすけどのへとぞかゝれたる。いしばし山のかつせんときも、此みんぜんをにしきのふくろにいれてはだのうへにつけられけるとぞきこえし。

### 平家とうごくげかう

さるほどにふくはらには、よりともにせいのつかぬさきに、いそぎうちてをくだすべしとて、くぎやうせんぎありて、たいしやうぐんには、にう道のまご、こまつのごんのすけせうしやうこれもり、ふくしやうぐんにはさつまのかみたゞのり、つがうそのせい三まんよき、九月十八日ふくはらのしんとをたつ。十九日にきうとにつき、やがて廿日とうごくへぞうちたゝれける。大しやうぐんこまつのごんのすけせうしやうは、しやうねん廿三、ようぎたいはいゑにかくともふでもをよびがたし。ちうだいのよろひ、からかはといふきせながをからうとに入てかゝせらる。あかぢのにしきのひたゝれに、もえぎおどしのよろひきて、れんぜんあしげなるむまに、きぶくりんのくらをひてのり給へり。ふくしやうぐんさつまのかみたゞのりは、こんぢの

からあやひ  
(第一本)

ひとあひ一日。

にしきのひたゝれに、からあやおどしのよろひきて、くろきむまのふとくたくましきにいかけ  
ぢのくらをひてのり給へり。むまくらよろひたちかたなにいたるまで、てりかゞやくほどいで  
たゝれたりしかば、めでたきけんぶつなり。たゞのりはとしごろみやばらの女ばうのもとへか  
よはれけるが、ある夜おはしたりけるに、その女ばうのもとへやんごとなき女ばうきやくにき  
たり、やゝひさしふものがたりし給ふ。さ夜もはるかにふけぬれ共、きやくかへり給はず。  
たゞのりのきばにしばゝたゞよひて、あふぎをしたひつかひければ、みやばらの女ばう、の  
もせにすだくむしのねとゆうにやさしくちずさみ給へば、さつまのかみ、やがてあふぎをつ  
かひやめてかへられけり。そのゝちおはしたりけるに、さてもひとゐはなにとてあふぎをばつ  
かひやめられしぞやととはれければ、いさかしましなどゝきこえ候ひしかば、さてこそつかひ  
やめて候へと申されけり。かの女ばうのもとより、たゞのりのもとへ、こそでを一かさねつか  
はすとて、ちさとのなごりのかなしさに、一しゆのうたをぞをくられける。  
あづまちのくさばをわけんそでよりもたゝぬたもとにつゆぞこぼるゝ  
さつまのかみの返事に、

わかれちをなにかなげかんこえてゆくせきもむかしのあとゝおもへば  
せきもむかしのあとゝよみぬる事は、此人のせんぞ平しやうぐんさだもり、まさかどついたう  
のために、あづまへげかうせし事をおもひいでゝよまれたりけるにや。いとやさしふぞきこえ  
ける。むかしはてうてきをたひらげにぐはいどへむかふ大しやうぐんは、まづさんだいてせ

しうへい―承平。

しうせき―蹤跡。

つたうを給る。しんぎなんでんにしゆつぎよなつて、このゑかいかにおんをひかへ、ないげのくぎやうさんれつして、ちうぎのせちゑをおこなはる。大しやうぐんふくしやうぐん、をのくれいぎをたゞしふして、せつたうをたまはる。しうへい天ぎやうのしうせきありといへ共、としひさしふしてなぞらへがたし。こんどはさぬきのかみ平のまさもりがさきのつしまのかみみなもとのよしちかをつみたうのために、いづもの國へ下かうせしれいとて、すゞばかり給はつて、かはのふくろにいられて、ざつしきがくびにかけさせてぞくだられける。せんじを給はつてせんぢやうへむかふ大しやうぐんは、みつのぞんぢあるべし。まづさんだいてちよくめいをかうぶるときいゑをわする。いゑをいづるときさいしをわする。せんぢやうにしててきにたゝかふとき身をわする。さればいまの平氏の大しやうぐんこれもりたゞのりも、さだめてかやうの事をばぞんぢせられたりけん、あはれなりし事どもなり。

御とも……従者の事な  
(覺一本)。

九月廿二日しんめん又いつくしまへ御かうなる。御ともにはさきのう大しやうむねもり、五でうの大なごんくにつな、とう大なごんさねくに、六かくうひやう衛のかみいゑみち、てん上人にはとうの中じやうしげひら、くないのせうむねのり、あきのかみありつなどぞきこえし。さんぬる三月にも御かうあつて、そのゆへにやはんねんばかりはしづかにして、ほうわうもとば殿よりくはんぎよなんどありしが、さんぬる五月たかくらのみやの御むほんによりうちつゞきしづまりやらず。ぎやくらんのせんべうしきりにしげし。ちようつねにあつて、てうしづかならざりしかば、ことに天がせいひつの御きねん、べつしてはせいたいふよの御きたうのためな

ちよう―地妖。

ふく—ふかくか。

しそうにかへつて—詞  
字にをよぶ(聲一本)

り。こんどはしきしにぼくじのほけきやうをしよしやくやうせらる。御ぐはんもんの御じひ  
つのさうあんあり。せつしやうどのせいしよありけるとぞうけ給る。そのぐはんもんにいは  
く、

けだしきく、ほつしやうのそらには、十四十五の月たかくはる。ごんげのちには、一いん一  
やうのぎふくあふぐ。それかのいつくしまのやしらは、しうみやうふもんには、かうけん  
ぶさうのみぎりなり。ゆうれいしやだんをめぐり、をのづから大じのたかくそばだてるをあ  
らはし、こかいしそうにかへつて、そらにぐぜいのしんくはうなる事をへうす。ふしておもん  
みれば、ふまいの身をもつて、かたじけなくもくはうわうのくらめをふみ、いまごんゆうを  
れいきやうのぐんにもてあそぶ。かんばうをしやざんのきよにたのしむ。ずいりのもとには  
めいおんをあふぎ、ほうきうの中にはれいたくをたる。そのつげきもにめいずるあり。もつ  
ばらたうねんなつのはじめ、あきのこう、しかもびやうあたちまたすおかして、いよくし  
んかんのくうならざる事をおもひ、きたうをもとむるといへども、ぶろさんじがたし。へい  
けいしきりにてんずるを、いじゆつのけんをほどこす事なく、しんぶの心ざしにしかず。か  
さねてとそうのぎやうをくはだゝんとす。ばくくたるかんらんそのこには、ちまたにふし  
てゆめをやぶる。せいくたるびやうのまへには、ゑんろにのぞんでまなこをきはむ。つゐ  
にふんゆのみぎりにつめて、しやうぐのむしろにことぶきす。しきしにしよしやしたてま  
つる、ぼくじのめうほうれんげきやう一ぶ、かいけつの二きやう、あみだきやう、はんにや

しんぎやうどうのめいきやう、てづからみづからこんでいのだいはほんくはんをしよしやしたてまつるのとき、さうしうさうはくのけい、ともにぜんりをそへ、うしほさりうしほきたるひゞき、そらにほんばいのごゑにくはし、でしほつけつのくもをじするの日、りやうおくのたくはいなしといへども、四かいのなみをしのぎ、二たびわたる。ふかくきゑんのあさからざる事をしる。そもくあしたにいのるかくひとりにあらず、くれにかへりまふするものかつせんけいなり。たゞしそんきのきゝやうおほしといへども、ぬんみやのわうけいいまだきかず。ぜんちやうほうわうはじめてそのぎをのこさる。でしべうしんふかくその心ざしをめぐらす。かのすうかうざんの月のまへには、かんぶいまだわくはうのかげをはいせず。ほうらいどうのくものそこには天せんむなしくゆうせきのちりをへだつ。たうしやのごときはかつてひるいなし。あふぎねがはくは、大みやうじん、ふしてこふ一じうきやう、あらたにたんきをてらし、たちまちげんおうをたれ給へ。うやまつて申。ぢしう四年九月廿九日

たい上天わう

とぞあそばされたる。

ふじがは

さるほどに平家の人々は、九えのみやこをたちて、ちさどのとうかいにおもむき給ふ。たひらにかにかへりのぼらん事もあやうきありさまどもにて、あるひは野ばらの露にやどをかり、ある

中にも……以下、經正  
竹生島詣。覺一本等は  
巻七にあり。

ひはたかねのこけにたびねして、山をこえかはをかさね、日かずをふれば、十月十六日には、平家するがの國、きよ見がせきにぞつき給ふ。みやこを三まんよきにいてしかども、ろしのつはもの共めしぐして、七まんよきとぞきこえし。せんぢんはすでにかんばら、ふじがはにすゝめども、ごぢんはいまだてごし、うつのにさゝえたり。中にもくはうごぐうのすけつねまさは、しいかくはんげんにちやうじ給へる人なれば、かゝるみだれの中にも、心をすましみづうみのみぎはにうちいでゝ、まんゝたるおきにこじまの見えけるを、とうひやう衛のじうありのりをめして、あれはいかなるしまぞととひ給へば、あれこそきこえ候ちくふしまと申。つねまさ、げにさる事あり。いざやさらばまいらんとて、あんざゑもんものり、とうひやう衛のじうありのりなんと申さぶらひども四五人めしぐして、せうせんにのり、ちくふしまへぞまいられける。ころはう月中の八日の事なれば、みどりにみゆるこずゑには、はるのなさをのこすかとおぼえたり。たにゝのあうぜつこゑおひて、はつねゆかしきほとゝぎす、おりしりがほにつげわたる。まつにふちなみさきみだれ、まことにおもしろかりし事共なり。つねまさふねよりあがり、此しまのありさまを見給ふに、心もことばもをよばれず。あるきやうのうち、なんゑんぶだいにみづうみあり。かい中にしまあり。こんりんざいよりおひいでたるすいしやうりんの山あり。つねに天によすむどころといへり。すなはち此しまの事なり。かのしんくはう、かんぶ、どうなんくはちよ、あるひははうじをもつてふしのくすりをたづね給ひしに、ほうらい見ずはいさやかへらじといふて、いたづらにせん中にておひ、天すいばうくと

して、見ゆる事をえざりけん、ほうらいどうのありさまも、これにはすぎじとぞ見えし。つね  
まさみやう神のまへにつゐひざまづゐて、それ大べんくどく天は、わうこのによらい、ほうし  
んの大じなり。べんざいめうをん、なはかくべつなりといへども、ほんち一たいにして、しゅじや  
うをさいどし給ふ。さんけいのともがらは、しよぐはんじやうじゅゑんまんすとうけ給る。た  
のもしふこそ候へとて、ほつせまいらせて、へんじのほどゝおもはれけれども、日もはやくれ  
にけり。ゐまちの月さしいでゝ、みづうみのうへもてりわたり、しやだんもいよゝゝかゞやひ  
て、まことにたつとかりけり。さよもふけゆけば、じやうちうのそうども、びはをたづねてさし  
をひたり。つねまさこれをだんじ給ふに、かのじやうげんせきじやうのひきよくには、みやも  
すみわたり、みやうじんかんおうにたへずして、つねまさのそでのうへにはくれうとげんじて  
見え給ふ。つねまさこれを見て、うれしさのあまりにしばらくばちをさしをき、めをふさぎ、  
ちはやぶるかみにいのりのかなへばやしるくもいろにあらはれにけり

さればおんてきをまなこのまへにしりぞけ、きうとをたゞいまおとさん事うたがひなしとよろ  
こんで、又ふねにのり、ちくぶしまをいでられたり。

大しやうこまつのごんのすけせうしやう、さぶらひ大しやうかづさのかみたゞきよをめして、  
これもりがぞんぢにはあしがらをうちこえてばんどうにていくさをせんといはれけれ、かづさ  
のかみ申けるは、ふくはらをたゞせ給ひしとき、にう道殿の御ぢやうには、いくさをばたゞき  
よにまかせさせ給へと候ひしぞかし。八かこくのつはもの共、みなひやう衛のすけどのにした



がひつゐて候なれば、なん十まんきか候はん。みかたの御せいは七まんよきとは申せども、くにくのかりむしやどもなり。馬も人もみなつかれふして候。いづするがのせいまいるべきだにもいまだ見えず候。たゞふじがはをまへにあて、みかたの御せいをまたせ給ふべふや候らんと申ければ、ちからをよばずひかへたり。かゝつしほどにひやう衛のすけ、あしがら山をうちこえて、するがの國こせがはにこそつき給へ。しなの、げんじどもはせきたりて一ツになる。うきじまがはらにてせいぞろひあり。廿八まんきとぞしるされたる。ひたちげんじさたけの太郎がぞつしき、しうのつかひに文もちて京へのぼるを、せんちんかづさのかみたゞきよ、これをとゞめて、もちたるふみをうばひとり、ひらひて見れば、女ばうのもとへのふみなり。くるしかるまじととらせてけり。そもくひやう衛のすけ殿のせいかほど、かきくととへば、をよそ八日九日のみちにははたとつゝゐて野も山もうみもかはもむしやで候。下らうは四五百千までこそものゝかずをしりて候へ。それよりうへはしらず候。こせがはにて一さく日人の申つるは、げんじの御せい甘まんきとこそ申つれ。かづさのかみこれをきゝ、あはれ大しやうぐんの御心ののびさせ給ひたるほどのくちおしき事は候はず。いま一日もさきにうちてをくださせ給ひたらば、あしがら山をうちこえて、八かこくに御いで候はゞ、はたけ山の一ぞく、大ばがきやうだいなとかまいらで候べき。これらだにもまいりなば、ばんどうにはなびかぬ草木も候まじとこうくはいすれ共かひぞなき。大しやうぐんこまつのごんのすけせうしやう、とうごくのあんないしやとて、なが井のさいとうべつたうをめし、やゝさねもり、なんちほどのつよゆ

みせいびやう、ばんどうにはいかほどあるぞとの給へば、さねもりあざわらひて申けるは、さてはそれがしを大やとおぼしめし候か、わづかに十三ぞくこそつかまつり候へ。さねもりほどい候ものは、ばんどうにはいくらか候。大やと申ちやうのもの、十五そくにをとつてひくは候はず。ゆみのつよさも、したゝかなるもの五六人してはり候。かゝるせいびやうどもがい候へば、よろひ二三oryやうもかさねてやすふいとをし候なり。大みやう一人にはせいのすくなきぢやう、五百きにはをとり候はず。むまにのりつれば、おつるみちをしらず、あくしよをはすれどもむまをたふさず。いくさは又おやもうたれよ、こもうたれよ、しすればのりこえゝたゝかひ候。さいこくのいくさと申は、おやうたれぬれば、けうやうし、いみはれてよせ、こうたれぬれば、そのおもひなげきによせず候。ひやうらうまいつきぬれば、そのたつくり、かりおさめてよせ、なつはあつしといとひ、ふゆはさむしときらひ候。とうごくにはすべてそのぎ候はず。かひしなのゝ源氏どもあんないはしつて候。ふじのこしよりからめてにやまい候らん。かう申せばとて、きみをおくさせまいらんとて申にはあらず。いくさはせいにはよらず、はかりごとによるとこそ申つたへて候へ。さねもりこんどのいくさにいのちいきて二たびみやこへまいるべしとおおえ候はずと申ければ、つはものどもこれをきひて、みなふるひわなゝきあへり。さるほどに十月廿三日にもなりぬ。みやう日源平ふじがはにてやあはせとぞさだめける。夜に入て平家がたよりげんじのちんを見わたせば、いづするがのにんみんどもが、いくさにをそれて、あるひは野にいり、あるひは山にかくれ、あるひはふねにのりうみかはにうか

び、いとなみのひの見えけるを、平家のつはものども、あなおびたゞしの源氏のちんのかがり  
びや、げに野も山もうみもかはもてきにてありけり。いかにせんとぞさはぎける。その夜のや  
はんばかりに、ふじのぬまにいくらもむれあたりける水とりどもが、なに、かおどろきたりけ  
ん、たゞ一どにばつとたちたるはをとの、大かぜいかづちなんどのやうにきこえけるを、すは  
やげんじの大ぜいさねもりが申つるにたがはず、さだめてからめてにもやまはるらん、とりこ  
められてはかなふまじ。こゝをばひみておはりのすのまたをふせげやとて、とる物もとりあへ  
ず、われさきにとぞおちゆきける。あまりにあはてさはぎ、ゆみとる物はやをしらず、人のむ  
まにはわれのり、わがむまをば人にのられ、あるひはつなぎたるむまにのりて、はすれ共くい  
ぜをめぐる事がぎりなし。しゆく／＼よりむかへとりてあそびけるゆうくんゆうちよども、あ  
るひはかうべをふみわれ、あるひはこしをふみおられてさけびおめくものもあり。廿四日の  
うのこくにげんじの大ぜい甘まんき、ふじがはにをしよせて、天もひゞき大ちもうごくほどき  
を三どつくりけれども、平家のかたにはをとせず。人を入れて見せければ、みなおちて候と  
申。あるひはてきのわすれたるよろひとりてまいる物もあり。あるひは大まくとつてまいるも  
のもあり。かたきのちんにははみだにもかけり候はずと申。ひやう衛のすけどのむまよりお  
り、かぶとをぬぎ、てうづうがひして、わうじやうのかたをふしおがみ、これはまつたくよ  
りともがかうみやうにあらず、ひとへに八まん大ぼさつの御はからひなりとぞの給ひける。やが  
てうちとりなればとて、するがの國をば一でうの四郎たゞより、とをたふみの國をばやすだの

三郎よしさだにあづけらる。平家をばつゞみてせむべけれども、さすがうしろもおぼつかなしとて、うきじまがはらよりかまくらへこそかへられけれ。かいだうしゆく／＼のゆうくんゆうちよども、あらいま／＼し、うちての大しやうぐんのやの一ツだにもいずしてにげのぼり給ふうたてさよ。いくさには見にげといふ事をだに心うき事にこそありけるに、これはきゝにげし給ひたりとわらひあへり。らくしよ共おほかりけり。みやこの大しやうぐんをばむねもりといふ。うちての大しやうをばごんのすけといふあひだ、平家をばひらやとよみなして、

ひらやなるむねもりいかにさはぐらんはしらとたのむすけをおとして

ふじがはのせゞのいはこそすみづよりもはやくもおつるいせへいじかな

かづさのかみ、ふじがはによろひすてたりけるをよめり。

ふじ川によろひはすてつすみぞめのころもたゞきよのちのよのため

たゞきよはにげのむまにやのりにけるかづさしりがひかてかひなし

さるほどに同十一月八日、大しやうぐんこまつのごんのすけせうしやうは、ふくはらへかへりのぼらるゝ。入道大きにいかつて、これもりをばきかいがしまへながすべし、さぶらひ大しやうかづさのかみたゞきよをばしざいにおこなへとぞの給ひける。平家のさぶらひらうせうさんくはいして、たゞきよがしざいの事、いかゞあるべしとひやうちやうす。その中にしゆめのはんぐはん、すみいでゝ申されけるは、たゞきよはむかしよりふかくじんとはうけ給りをよび候はず。あのぬし十八のとしとおぼえ候。とばのほうざうに五きない一のおくたう二人にげこもり

て候ひしを、よせてからめんと申もの一人も候はざつしに、此たゞきよ、はくちうにたゞ一人つみちをはねこえいりて、一人をばうちとり、一人をばいけどつて、こうだいになをあげたりしものに候。こんどのふかくはたゞ事ともおぼえ候はず。それにつけてもよく／＼ひやうらんの御つゝしみ候べしとぞ申ける。同十日ちもくおこなはれて、大しやうぐんこまつのごんのすけせうしやうこれもり、うこんゑの中じやうになり給ふ。うちての大しやうぐんときこえしかども、させるしいだしたる事もましまさず。これはさればなに事のくはんしやうにやと人々ささきあへり。むかしまさかどついばつのために、大しやうぐんには平しやうぐんさだもり、ふくしやうぐんにはたはらとうだひでさとのきやううけ給はつて、ばんどうへはつかうしたりしかども、まさかどたやすふほろびがたかりしかば、かさねてうちてをくだすべしとくぎやうせんぎあつて、大しやうぐんにはうちのみんぶきやうたゞぶん、きよはらのしげふち、ぐんけんといふくはんを給はつてくだられけり。するがの國きよ見がせきにやどしたりし夜、かのしげふちまん／＼たるかい上をゑんけんして、ぎしうのひのかげさむふしてなみをやく、ゑきろのすゞのこゑよる山をすぐるといふからうたをたからかによみ給へる。たゞぶんゆゝしくおぼえてかんるいをぞながされける。さるほどにまさかどをば、さだもりひでさとつめにうちとつてけり。そのくびをもたせてのぼるほどに、するがの國きよ見がせきにてゆきあふたり。それよりぜんごの大しやうぐんあひつれてじやうらくす。さだもりひでさとくはんしやうおこなはれけるとき、たゞぶんしげふちにもくはんしやうあるべきかとくぎやうせんぎあり。九でうの

ゆうぜうしやうもちすけこう申させ給ひけるは、ばんどうへうちてにむかふたりといへども、まさかだたやすくほろびがたきところに、此人どもみことのりをかうぶつて、せきのひかしへおもむくときに、てうてきすでにほろびたり。さてはなどかくはんしやうなかるべしと申させ給へども、そのときのしつべいをのゝみやどの、うたがはしきをなす事なかれといきものに候へばとて、つゐにおこなはせ給はず。たゞぶんこれをくちおしき事にして、をのゝみやどのゝ御するをばよく見なさん。九でうどのゝ御するをばいつの世までもしゆごじんとならんとかひつゝ、うえじにゝぞしゝ給ひけれ。されば九でうどのゝ御するはめでたくさかへさせ給へども、をのゝみやどのゝ御するはしかるべき人もまします。いまはたえ給ひけるにこそ。

## 五せつのさた

おなじくふくはらに十一月十三日だいいりつくりいだして御せんかうあり。此京はきたは山そびえてたかく、みなみはうみちかふしてひきければ、なみのをとつねにかまびすしく、しほ風はげしきところなり。たゞしだいは山の中なれば、かの木の丸どのもかくやらんとおぼえて、中ゝゆうなるかたもありけり。人々のいゑゝは、野の中たの中なりければ、あさのころもはうたねども、といちのさとゝもいひつべし。みやこには大じやうゑおこなはるべしとて、御けいのぎやうがうなる。大じやうゑと申は、十月のすゑ、ひがしがはにぎやうがうなつて、御

けいあり。だいのきたのにさいちやうしよをつくりて、じんぶくじんぐをとゝのふ。大ごくでんのまへ、れうびだうのだんのしたに、くはいりうでんをたてゝ、御ゆをめす。おなじきだんのならびに大じやうきうをつくりて、しんせんをそなへ、しんゑんあり。御ゆうあり。大ごくでんにて大れいあり。せいしよだうにして御かぐらあり。ほうらくゑんにてゑんくはいあり。しかるをふくはらには大ごくでんもなければ、たいれいおこなはるべきところもなし。ほうらくゑんもなければ、ゑんくはいもおこなはず。せいしよだうもなければ御かぐらそうすべきやうもなし。こんねんはしんじやうゑ、五せちゑばかりにてあるべきよし、くぎやうせんぎあり。されどもしんじやうゑのまつりは、きうとのじんぎくはんにてあり。五せちゑはこれきよ見はらの天わう、大とものわうじにおそはれさせ給ひて、よしのゝみやにてましゝしとき、月しろくあらしはげしかりし夜、御心をすましつゝ、ことをだんじ給ひしに、しんによあまくだり、五たびそでをひるがへす。これぞ五せちのはじめなる。こんどのみやこうつりは、きみもしんも御なげきあり。さんもん、なんどをはじめて、しよじしよざんにいたるまで、しかるべからざるよし一どうにうつたえ申。さしもよこがみをやぶられし大じやうにう道も、げにもとやおもはれけん、同十二月二日にはかにみやこかへりありけり。いそぎふくはらをいでさせ給ふ。りやうゑん六はらに入給ふ。ちうぐうもぎやうけいなる。せつしやうどのをはじめてまつり、大じやう大じんいげ、くぎやうてん上人、われもゝとぐぶせらる。にう道しやうこくをはじめとして、平家の一もんくぎやうてん上人、われさきにとぞのぼられける。たれか

心うかりつるしんとにかたときものこるべき。さんぬる六月よりいゑどもこぼちくだし、しざいざうぐをはこびよせ、かたのごとくとりたてたりつるに、又物ぐるはしきみやこがへりありければ、なにのさたにもをよばず、うちすてゝのぼられけり。をのゝすみかもなくて、やはた、かも、かすが、さが、うづまき、にし山、ひがし山のかたほとりにつゐて、みだうのくはいらう、やしろのはいでんなどにたちとゞまつてぞ、しかるべき人々もおはしける。そもゝゝこんどのみやこうつりのほんゐをいかにといふに、きうとはきたひがし、みねちかくして、いさゝか事にもかすがのしんぼく、日よしのしんよなんといふもみだれがはし。ふくはらは山かきなり江へだゝり、ほどもさすがとをければ、さやうの事たやすからじとて、にう道しやうこくのはからひいだされたりけるとかや。同廿三日あふみげんじのそむきしをせめんとて、大しやうぐんには、にう道の三なん、さひやう衛のかみともゝり、ふくしやうぐんにはさつまのかみたゞのり、そのせひ二まんよき、あふみの國へはつかうす。山もと、かしはぎ、にしごりなんといふ源氏ども、いちゝにみなせめおとし、やがてみのおはりへこえ給ひけり。

ならえんじやう

みやこにはたかくらのみやをんじやうじへじゆぎよのとき、なんとの大しゆどうしんして、あまつさへ御むかへにまいるでう、これもつてうてきなり。さらばならをもせむべしといふほどこそあれ、なんとの大しゆおびたゞしくほうきす。せつしやうどのより、ぞんちのむねあら



ばいくたびもそうもんにこそをよばめとおほせけれども、ひたすらもちひたてまつらず。うく  
 はんのべつたうたゞなりを御つかひにしてくださいければ、しやのりものよりとつてひきおと  
 せ、もとゞりきれとさうどうするあひだ、たゞなりいろをうしなひてにげのぼる。つぎにゑも  
 んのすけちかまさをくださる。これももとゞりきれと大しゆひしめきければ、とる物もととりあ  
 えず。そのときはくはんがくみんのぎつしき二人がもとゞりきられにけり。又なんとはおほ  
 きなるぎちやうのたまをつくりて、これは平しやうこくのかうべとなづけて、うてふめなんど  
 ぞ申ける。ことのまれやすきはわざはひのまねくなかだちなり。ことつゝしまざるはやぶれを  
 とるみちなりといへり。此にう道しやうこくと申は、かけまくもかたじけなくも、たうぎんの  
 ぐはいそにてまします。しかるをかやうに申けるなんとの大しゆ、をよそはてんまのしよゐと  
 ぞ見えたりける。大じやう入道かやうの事共をつたへきゝて、いかでかよしとおもはるべき。  
 かつうはなんとのらうぜきをしづめんとて、びつ中の國のぢう人せのをの太郎かねやすを、やま  
 との國のけんびいしにふせられ、かねやす千五百よきにてやまとの國へはつかうしたりしを、  
 大しゆおこつて、かねやすがそのせいさんぐにうちちらし、いゑのこらうどう廿よ人がくび  
 をとつて、さるさはのいけのはたにぞかけならべたる。にう道しやうこく大きにいかつて、さ  
 らばなんとをせめよとて、やがてうちてをさしむけらる。大しやうぐんには、にう道の四なん  
 とうの中將しげひら、ふくしやうぐんには、中ぐうのすけみちもり、そのせい四まんよきにて、  
 なんとへはつかうす。なんとの大しゆもらうせうきはらず、七千よ人かぶどのをゝしめ、なら

ぼし帽子。

ざかもと、はんにやじ、二かしよのじやうくはく、ふたつのみちをきりふさぎ、ざい／＼しよ／＼にさかもぎをひき、かいだてかひてまちかけたり。平家は四まんよきを二てにわけて、ならざか、はんにやじ二かしよのじやうくはくにをしよせて、ときをどつとぞつくりける。大しゆはみなかちだちになつて、うち物にてたゝかふ。くはんぐんはむまにてかけむかひ／＼、あそこ／＼につかけ／＼、さしつめひきつめさん／＼にいれば、おほくのもの共うたれにけり。うのこくにやあはせして、一日たゝかひくらしぬ。夜にいりて、ならざか、はんにやじ二かしよのじやうくはくともにやぶれぬ。おちゆく大しゆのなかに、さかの四郎やうかくといふあくそうあり。うち物とつても、ゆみやをとつても、ちからのつよさも、七大じ十五大じにすぐれたり。もえぎおどしのはらまきに、くろいとおどしのよろひをかさねてぞきたりける。ぼしに五まいかぶどのをしめ、さうのてには、ちがやのはのやうにそつたるしらえの大なぎなた、こくしつのたちをもつま／＼に、どうしゆく十よ人ぜんごにたて、てがいのもんよりうちいでたり。これぞしばらくさゝへたる。おほくのぐんびやうむまのあしながれてうたれにけり。されどもくはんぐん大ぜいにて、いれかえ／＼せめければ、やうかくがぜんごさうにふせぐところのどうしゆくみなうたれぬ。やうかくひとりたけれども、うしろまばらになりければ、ちからをよばず、ひきしりぞく。夜いくさになりて、くらさはくらし、大しやうぐんどうの中じやう、はんにやじのもののほかにうちたちて、どしうちしてはあしかりなん、ひをいだせと下ぢせられけるほどそあれ、平家のせいの中に、はりまの國のちう人、ふく井のしやうじ、二郎太夫

しやうじ 庄下司  
(覺一本)

とうじ 藤氏

なそう 半天  
(覺一本)

まんぐはつ 満月。

ともかたといふもの、たてをわりたいまつにして、ざいけにひをぞつけたりける。十二月廿八日の夜なりければ、風ははげしし、ひもとは一ツなりけれ共、ふきまよふ風におほくのがらんにふきつけたり。はちをもおもひ、なをもおしむほどのものは、ならざか、はんにやじにてうたれにけり。ぎやうぶにかなへるものは、よし野とづがはのかたへおちゆく。あゆみもえぬらうそうや、じんじやうなるしゆがくしや、ちごども、をんなわらはべは、大ぶつでん、さんかいじのうちへわれさきにとぞにげゆきける。大ぶつでんの二かいのうへには、千よ人にげのぼる。てきのつゞくをのぼせじと、はしをばひめてけり。まうくははまさしくをしかけたり。おめきさけぶこゑ、しうねつ大しうねつ、むげんあびのほのほのそのざい人も、これにはすぎじどぞおぼえたる。こうぶくじは、たんかいこうの御ぐはん、とうじるいだいのてらなり。とうこんだうにおはしますぶつぼうさいしよのしやかのざう、さいこんだうにおはしますじねんゆしゆつのくはんぜをん、るりをならべし四めんのらう、しゆたんをまじえし二かいのらう、九りんそらにかゞやきし二きのたうも、たちまちにけぶりとなるこそかなしけれ。とう大じはじやうちうふめつ、じつぼうじやくくはうのしやうじんのみほとけとおぼしめしなぞらひて、しやうむくはうてい、てづからみづからみがきたて給ひし、こんどう十六ぢやうのるしやなぶつ、うしつたかくあらはれて、なそうのくもにかくれ、びやくがうあらたにはいせられ給ひしまんぐはつのそんようも、みぐしはおちて大地にあり。御しんはわきあふて山のごとく、八まん四千のさうがうは、あきの月はやく五でうのくもにおぼろなり。四十一のやうらくは、よる

くそん―朽損。

のほしむなしく十あくの風にたゞよへり。けぶりはなかぞらにみち／＼て、ほのほはこくうにひまもなし。まのあたりに見たてまつるものは、さらにまなこをあてず。はるかにつたへきく人は、きもたましみをうしなへり。ほつさう三ろんのほうもん、しやうげう、すべて一くはんものこらず。わがてうはいふにをよばず、天ぢくしんだんにもこれほどのほうめつはあるべしとおぼえず。うでん大わうのしまこんじきをみがき、びしゆかつまがしやくせんだんも、わづかにとうじんのれいぎうなり。いはんやこれは、なんゑんぶだいの中には、ゆい一ぶさうの御ほとけ、ながくそんのごあるべしとおぼえざりしに、いまどくゑんのちりにまじはつて、ひさしくかなしみをのこし給へり。ぼんじやく四わう、りうじん八ぶのみやうしゆも、おどろきさはぎ給ふらんとぞ見えし。ほつさうおうごのかすが大明神、いかなる事をおぼしめされけん、しんりよのほどもはかりがたし。かすが野の露もいろかはり、みかさ山のあらしのをとまで、うらむるさまにぞきこえける。ほのほの中にてやけしぬる人々、かずをしるしたりければ、大ぶつでんの二かいのうへには、一千七百よ人、さんかいじには八百よ人、あるみだうには五百よ人、あるみだうには三百よ人、つぶさにしるしたりければ、三千五百よ人なり。せんぢやうにてうたるゝ大しゆ千よ人、せう／＼ははんにやじのもののまへにきりかけ、せう／＼はくびをもたせてみやこにのぼり給ふ。廿九日どうの中じやうなんとをほろぼしてほつ京へかへる。にう道しやうこくばかりぞいきどをりはれてよろこばれける。中ぐう、一ゐん、しやうくはう、せつしやうどのいげの人々は、あくそうをこそほろぼすとも、がらんはめつすべ

しやとぞ御なげきある。しゆとのくびども、もとはおほぢをわたしてごくもんの木にかけらるべしときこえしかども、とう大じ、こうぶくじめつするあさましきに、さたにもをよばず。あそここのみぞやほりにぞすてをきける。しやうむ天わうしんびつの御きもんにも、ちんがてらすあびせば天下のすいびなり、ちんがてらこうぶくせば、天下もこうぶくすべしとあそばされたり。されば天下すいびせん事うたがひなしとぞ見えたりける。あさましかりつるとしもくれ、ぢしうも五ねんになりにつけり。